

福岡外環状道路関係
埋蔵文化財調査報告

—14—

七隈古墳群C-1号墳・野芥遺跡第10次・飯倉G遺跡第4・5次

2002

福岡市教育委員会

福岡外環状道路関係 埋蔵文化財調査報告

—14—

七隈古墳群C-1号墳・野芥遺跡第10次・飯倉G遺跡第4・5次



2002

福岡市教育委員会

序

福岡外環状道路は、福岡市西区姪浜から糟屋郡粕屋町戸原までを結ぶ都市計画道路で、延長26.4kmの路線をいいます。本道路は福岡市の交通問題解決の鍵を握る幹線道路で、早急な供用が望まれています。現在、一部区間でその使用がなされていますが、他の区間においても供用に向けての工事、そして発掘調査が行なわれています。

本書は、外環状道路建設工事に先だって行ないました、七隈古墳群C-1号墳調査、野芥第10次調査、飯倉G4・5次調査の成果について報告するものです。これら遺跡にみる遺構、遺物の数々は、地域それぞれにおける歴史を考える上で重要な手がかりとなることでしょう。本書が、市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の地域の歴史に対する理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料として御活用戴ければ幸いです。

最後になりましたが、以上の調査において、費用負担をはじめとする多大な御理解・御協力をいただきました、国土交通省福岡国道工事事務所、福岡北九州高速道路公社、福岡市交通局、ならびに地元の方々を始めとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成14年3月5日

福岡市教育委員会
教育長 生田征生

—例言—

- ・本書は、福岡市外環状道路および地下鉄3号線建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が発掘を行った、七隈古墳群C-1号墳調査、野芥遺跡第10次調査、飯倉G遺跡第4・5次調査の報告である。
- ・本書における各調査報告の編集は、調査担当者が行なった。詳細は各報告に拠られたい。

飯倉古墳群C-1号墳	調査担当：藏富士 寛
野芥遺跡第10次	調査担当：藏富士 寛
飯倉G遺跡第4・5次	調査担当：星野 恵美
- ・本書に関する記録、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

目 次

・七隈古墳群C-1号墳	1
・野芥遺跡第10次	31
・飯倉G遺跡第4・5次	39

七隈古墳群C群第1号墳

遺跡調査番号	0007		遺跡略号	NNK-C	
地番	城南区梅林4丁目地内		分布略記号	七隈74	
開発面積	450.0m ²	調査対象面積	450.0m ²	調査面積	340m ²
調査期間	2000.7.4~2000.8.18				

野芥遺跡第10次

遺跡調査番号	0039		遺跡略号	NKE	
地番	早良北野芥1丁目地内		分布略記号	野芥83	
開発面積	513.0m ²	調査対象面積	513.0m ²	調査面積	300.0m ²
調査期間	2000.9.4~2000.9.27				

飯倉G遺跡第4次

遺跡調査番号	9964		遺跡略号	IKRG-4	
地番	城南区梅林4丁目414-1		分布略記号	七隈74	
開発面積	2,803m ²	調査対象面積	1,250m ²	調査面積	600m ²
調査期間	1999.3.9~1999.4.27				

飯倉G遺跡第5次

遺跡調査番号	9962		遺跡略号	IKRG-5	
地番	城南区梅林5丁目137-1		分布略記号	七隈74	
開発面積	821m ²	調査対象面積	821m ²	調査面積	170m ²
調査期間	1999.5.24~1999.6.10				

Nanakuma

七隈古墳群C-1号墳

本文目次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II	位置と環境	2
1.	地理的・歴史的環境	2
2.	七隈古墳群とその周辺	2
III	調査の記録	4
1.	古墳（C-1号墳）の調査	4
(1)	古墳の現況	4
(2)	墳丘	6
(3)	主体部	8
(4)	遺物	14
IV	まとめ	17

挿図目次

図1	筑山周辺の郭集積 (1/10,000)	3	図9	閉塞 (1/30)	11
図2	七隈古墳群 (1/8,000)	3	図10	石室内遺物出土状況 (1) (1/30)	12
図3	周辺地形 (1/200)	4	図11	石室内遺物出土状況 (2) (1/20)	13
図4	C-1号墳現況 (1/60)	5	図12	石室内出土遺物 (1) (1/2)	14
図5	墳丘土層 (1/40)	6	図13	石室内出土遺物 (2) (1/3)	15
図6	墳丘遺存 (上)・地山地形 (下) (1/100)	7	図14	墳丘出土遺物 (1/3)	16
図7	主体部 (1/30)	9	図15	その他の時代の遺物 (2/3)	17
図8	石室構造過程 (1/30)	10			

図版目次

図版1	七隈古墳群C群現況 (北東から)	図版4	1号墳丘遺存状況 (東北から)	図版7	1号坑石室 (入口・前庭部)
	七隈古墳群C群現況 (東から)		1号墳丘遺存状況 (南から)		1号坑石室 (右袖部)
	七隈古墳群C-2号墳 (北から)		1号墳丘遺存状況 (南西から)		1号坑石室 (左袖部)
図版2	七隈古墳群C-1号墳 (北から)	図版5	石室内遺物出土状況 (奥壁側から)	図版8	1号坑石室 (石室内より入り口)
	七隈古墳群C-1号墳 (北西から)		石室内右袖部隅遺物出土状況		1号坑石室 (右側壁)
	石室内現況 (奥壁側から)		石室内左側壁側遺物出土状況		周溝土槽
図版3	1号墳坑丘土層 (北西から)	図版6	1号坑石室 (閉塞)	図版9	出土遺物
	1号墳坑丘土層 (東北から)		1号坑石室 (石室内より閉塞)		
	1号坑石室閉塞部上層		1号坑石室 (前庭右袖部)		

一例言一

- 本章は福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、平成12年度（2000年7月1日～2000年8月18日）に行なった七隈古墳群C-1号墳の調査報告である。
- 本章で使用した遺構実測図の内、図1・2は井澤洋一（福岡市教育委員会）氏らが作成し、その他のものは、調査担当者である藤富士寛のほか、下原幸裕、津曲大祐（共に福岡大学大学院生）が作成した。
- 本章で使用される方位は座標北である。
- 本章の執筆・編集等は、すべて藤富士が行なった。

I はじめに

1. 調査に至る経緯

近隣における梅林遺跡調査の際、調査担当者であった井澤洋一氏により、外環状道路予定地にある弓池のほとりに、2基の古墳が確認された。その後、2000年2月18日～21日にかけて、古墳の測量調査が行なわれ、同時に土蓋の充填による古墳の保護がはかられた。

この後、外環状道路の工事進捗に伴い、当古墳に対する処置が問題となった。しかし、用地の買収など一部の条件整備が整わず、協議を重ねた結果、まず道路予定地内に存在する1号墳（七隈古墳群C-1号墳）の調査を先行して調査を行うこととなり、2000年7月14日より、1号墳の調査を開始した。尚、道路予定地外ではあるが、工事による影響を受ける2号墳に関しては、後日調査を行うことになっている。

2. 調査の組織

調査委託	建設省（現 国土交通省）九州地方建設局福岡国道工事事務所 福岡北九州高速道路公社
調査主体	福岡市教育委員会
調査範囲	文化財部埋蔵文化財課 課長 山崎純男 検査第1係長 山口謙治
事前審査	埋蔵文化財課 事前審査係長 田中寿夫 薩本正志
庶務担当	文化財整備課 宮川英彦
調査担当	文化財部埋蔵文化財課 主任文化財主事 米倉秀紀 薩富士寛 下原幸裕 津曲大祐（以上福岡大学大学院生）
調査作業	網田昭雄 鬼塚友子 西口キミ子 西嶋利規 西島マツコ 西嶋ムラ子 西嶋洋子 平田千鶴子 臨坂ミサヲ
整理作業	池崎那津子（筑波大学学生） 柴田加津子 萩本恵子 日名子節子

II 位置と環境

1. 地理的・歴史的環境（図1）

早良平野は福岡市西南部に広がる平野で、その西側を長垂丘陵、東側を飯倉丘陵などにより画される。平野の西よりには室見川が流れ、平野の多くは室見川等の冲積作用により形成される。早良平野の東縁には、油山の山塊があり、飯倉丘陵もこの油山から北方に延びた丘陵の一つである。

その油山より延びる丘陵一帯では、多くの群集墳が営まれたことで知られている。油山山麓の群集墳は、今回調査した七隈古墳群を境に、東西に分けることが可能であり、これは後の比伊郷、野芥郷の境とも一致するとみなされる。油山西麓には、三郎丸古墳群、重留古墳群、クエゾノ古墳群、山崎古墳群、西油山古墳群、霧ヶ滝古墳群、影冢古墳群、駄ケ原古墳群、大谷古墳群等があり、東麓には倉瀬戸・早苗田古墳群、鳥越古墳群、瀬戸口古墳群、東油山古墳群、桧原古墳群、太平寺古墳群、柏原古墳群等の古墳群が存在する。また、北方へ細長く延びる飯倉丘陵上には、飯倉古墳群、下隈古墳群がある。これら古墳群は、いずれも古墳時代後期を築造の中心とするものであるが、クエゾノ古墳群のように古墳時代中期（集成編年6～8期）に営まれた古墳群も存在する（常松編1995）。

七隈古墳群もまた、以上のような油山より延びる丘陵一帯に営まれた古墳群である。

2. 七隈古墳群とその周辺（図2）

今回の調査以前では、七隈古墳群は、A・B2支群、計10基の古墳で構成されていた。周辺の開発は進み、往時の状況を窺うには困難を伴うが、現況をみれば古墳の分布は散漫であるといえ、また、A群、B群は互いに離れた位置にある。今回調査を行なった七隈古墳群C群は、現在、A群の存在する丘陵の西隣にある「弓池」のほとりに存在する。

A群は8基の古墳で構成される。その内、5基（1～4・7号墳）が破壊され、残る3基（5・6・8号墳）のみが調査されている（井澤洋一編1985）。5号墳は、墳丘規模、内部主体など詳しいことは不明だが、トレンチ調査の際、鉄製品、玉類、須恵器が採取されている。その須恵器をみると、古いものではTK10型式（新）期のものが含まれている。6号墳は横穴式石室を持つ、現況では径20m程を測る円墳である。横穴式石室は腰石部分のみが残存しており、玄室の平面プランは3.2×2.5mの長方形を呈する。また、羨道部には閉塞石（板石）が残る。卡類、須恵器、土師器が出土しており、須恵器はTK10型式期の特徴を有している。横穴式石室の構造は、やや古式を留めており、当古墳はTK10型式（占）期に位置付けることができよう。5号墳とは、ほぼ同時期か、やや先行するものといえようか。8号墳は墳丘の変更が激しく、その形態は不明である。主体部は横穴式石室で、玄室は1.8×1.8mの方形プランを呈する。羨道部の途中に塊石を積み上げて、閉塞を行う。鐵鏃、鏃先といった鉄製品のほか、玉類、須恵器、土師器が出土している。また、羨道・墓道には、多量の鉄滓が供給されていた。このように、七隈古墳群A群は、油山山麓に展開する他の群集墳と同様、古墳時代後期より築造の始まる群集墳であるといえる。

当調査地の周辺では、近年では古墳のみならず、集落の状況も明らかになりつつある。飯倉A・G・E遺跡では古墳時代の竪穴住居等が検出されており、また隣地で行なわれた梅林遺跡第1次調査では、古墳時代の竪穴住居、掘立柱建物が発見されているが、中でも「壁立建物」の検出は注目されるものであろう。調査を担当した井澤洋一氏は、当遺跡と渡来人の関係を想定している（井澤編2000）。

井澤洋一編1985『鳥越・七隈古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第124集

井澤洋一編2000『梅林遺跡 第1次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第648集

常松幹雄編1995『クエゾノ遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第420集



図1 油山周辺の古墳群(1/10,000)

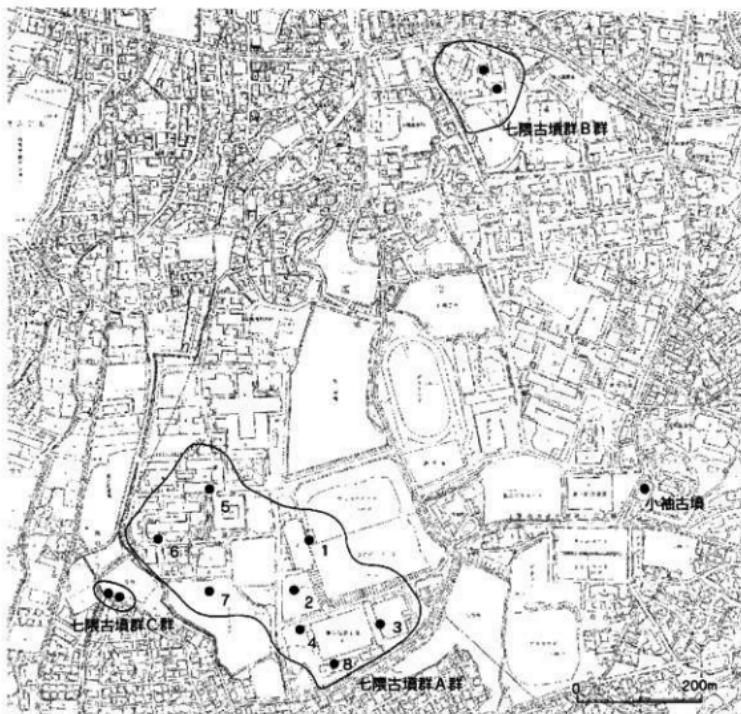


図2 七郎古墳群(1/8,000)

III 調査の記録

1. 古墳（C-1号墳）の調査

(1) 古墳の現況（図3・4）

1号墳は現在の池（弓池）の南西側斜面に存在している。古墳周辺の地形は、池の護岸などに由来するのであろう、近年に至るまでの改変が相当に進んでおり、南側7~8mほどの位置には、マンションが建つなど開発の進展も著しい。その中で1号墳は、度重なる開発のためか、現況で目視する限り、墳形を窺うことの出来るような上部は全く認められず、また石室石材と目される石材が周辺に散乱していなければ、古墳の存在を認めることはかなりの困難を作う。

また弓池は、調査時にはさほどの水位を持つものではなく、むしろ沼地を想像させるような有様であったが、梅雨時などの増水時にはかなり水位が上がっているようで、石室壁面の汚れ具合をみると、増水時には古墳の半ばが水没していたようである。このような、現在は池のほとりにあたるという立地は、水位の変動による侵食という影響をも古墳に与えつづけている。

古墳上は、雑木で覆われているにもかかわらず、古墳の下半は、主体部である横穴式石室下部の石組が露出していた。この奇妙な状況は、池の水による侵食により古墳下部の盛上がりさらわれているにもかかわらず、上部のそれは木々の根によって支えられ、流失しないで残っていたために起こったものである。つまり、例えるならば、露出した横穴式石室の上半に、木根による「傘」をかぶせたような格好を呈していたのである。

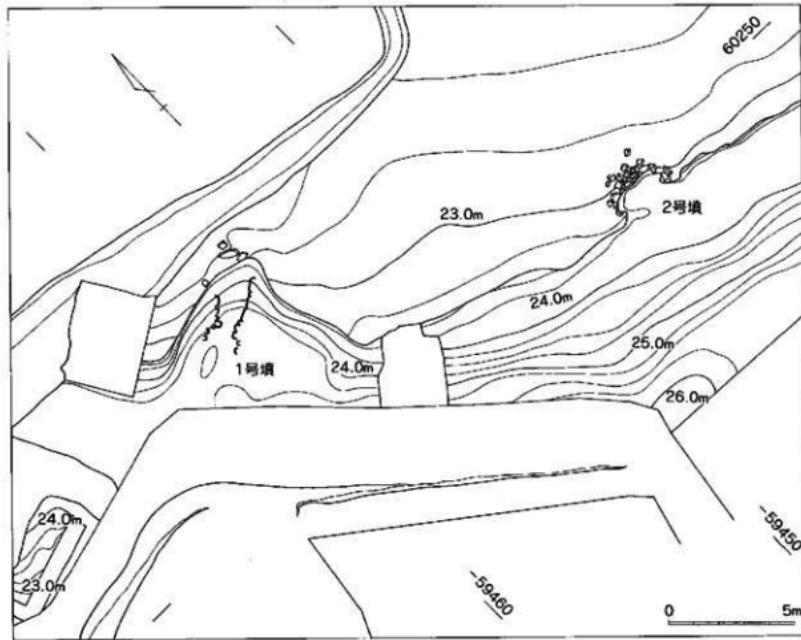


図3 周辺地形(1/200)

横穴式石室は奥壁の多くが破壊され、そのため、その部分より石室内部の状況を見る事が調査前から可能であった。その際、右袖部の一隅に、大形甕、蓋杯がまとまって置かれている様子がみえ、また床面には、刀子などの鉄製品がいくつか散乱している状況も確認された（調査開始前、左袖部に立て掛けるように、「管状」の鉄製品がみえていたが（図版2下）、現代の混入物（鉄パイプ）であることが判明した）。

このように、現況においても、また調査を行なう上でも、当古墳は極めて危険な状況にあった。そのため、調査はまず、池の一角を銅矢板で区切り、水の進入を防いだ後に、水中ポンプにより、常時雨水や涌水の排出を行なった。そのため、少々の降雨による増水では、問題なく調査可能になった。そして、古墳自体には、池の水の浸食作用による石室内部などの空洞部分に土嚢を詰め、上砂等の崩落防止に努めることとした。上蓋の充填にあたっては、石室内の露出した遺物が動かないよう、細心の注意を払った。このような手配を行なった後、墳丘の調査に着手し、墳丘調査の終了を待って、石室内部の調査に着手した。

なお、1号墳の東側6mの位置には、もう1基、古墳が存在する（C-2号墳）。この2号墳は、墳丘盛土の大半が流出しているようで、石室石材の多くが露出していた。現況から、石室の形態は判然としないが、露出した石材の状況をみると、1号墳に比してやや小形の、横穴式石室である可能性が高い。時期的にも、1号墳と近接したものであろう。今までのところ、円池の周辺では2基の古墳が存在するのみであり、他の古墳は確認されていない。七隈古墳群C群は、この2基のみによって構成されている。

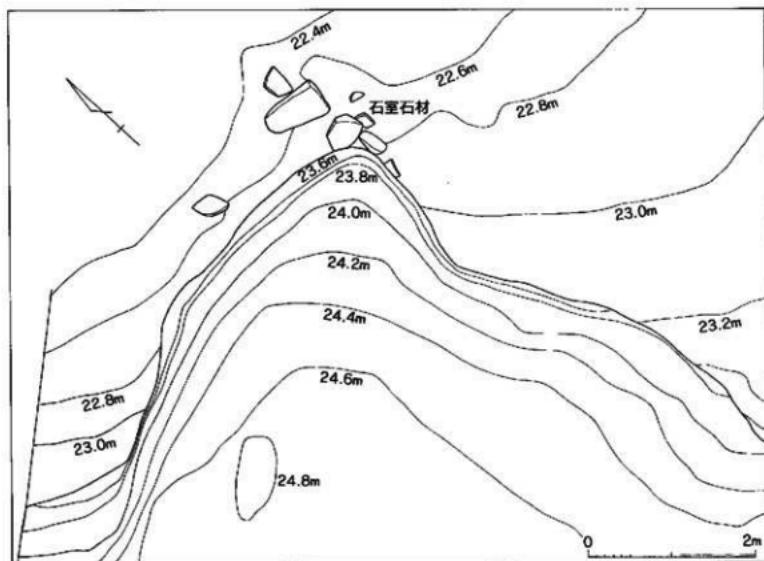


図4 C-1号墳現況(1/60)

(2) 墳丘

a. 墳丘土層 (図5)

前述したように、1号墳ははっきりと墳丘の様子を確認できるような状況ではなかった。そのためまず、墳丘の状態を確認するためのトレンチ調査を行った。石室を基準として、奥壁側、左右側壁側、そして石室入口側と計4本のトレンチを設定、調査を開始した。トレンチ調査の結果、主体部に関しては、横穴式石室の天井部が既に失われていたことが確認できた。また、奥壁は破壊を受けて一部しか残っておらず、墳丘盛土も流出しており、左側壁側の墳丘盛土も残っていないことが判明した。したがって、成果の半がった、右側壁側トレンチ、および石室入口側に設けたトレンチの所見について、以下に述べていくことにしたい。

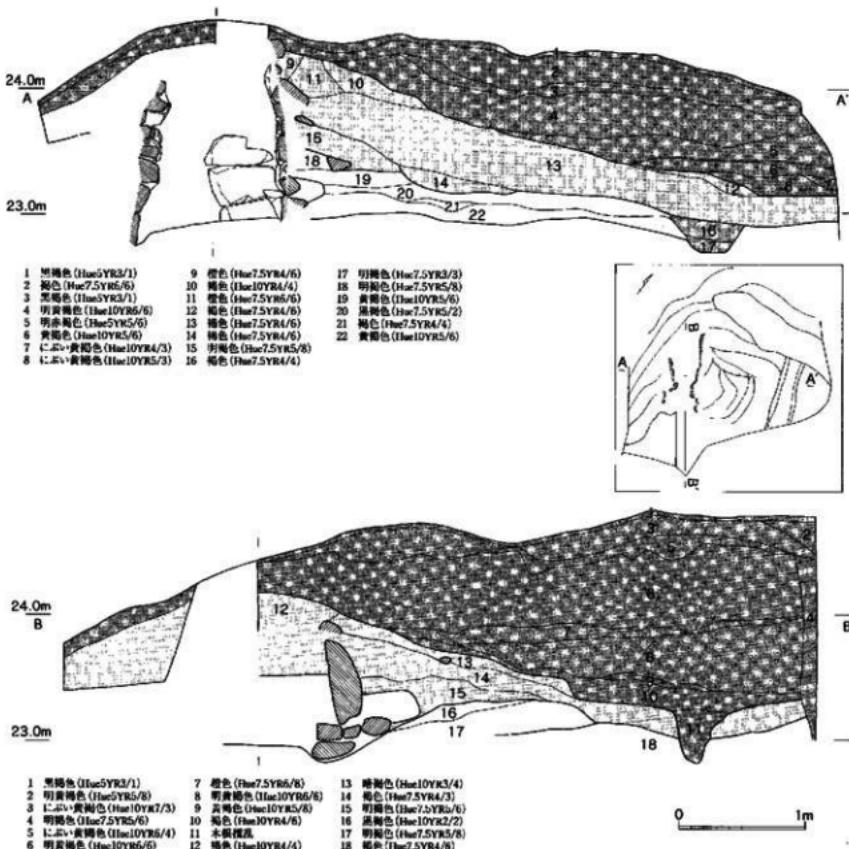


図5 墳丘土層 (1/40)

右側壁側トレンチ（図5上）

このトレンチは、古墳の現況を考慮し、石室中心を通る石室横断面線より、やや石室入口側に設定した。1～15層までが客土および流土で、確実に墳丘に相当するものは18～22層である。

1～11層は、比較的新しい時期の客土層である。1・3層は土壤化して黒味を帯びており、少なくとも2回に分けての埋め立てが行われたことがわかる。この客土は池の護岸等に起因するものであろう。13～15層までが墳丘等の流出により形成されたものである。天井部が破壊されるなど、この古墳は相当の破壊を受けおり、その際に形成されたものであろう。このトレンチからは、周溝を検出することができた。16・17層が周溝内堆積土で、17層はやや黒味を帯びている。

18～22層が墳丘にある。20層は土壤化し、黒褐色を呈しており、古墳築造時の旧表土であろう。墳丘盛土が18・19層、21・22層が地山である。

石室入口側トレンチ（図5下）

前述したように、石室天井石は失われていたため、このトレンチでは墳丘を確認することができなかった。1～10層が客土、11層は木根による擾乱である。1・4層は土壤化しており、これは右側壁・側トレンチにおける1・3層に対応するものである。12・13層が墳丘からの流土などにあたる。14層は褐色を呈し、やや黒味を帯びており、これも土壤化を示すものと考えられる。ところで、この層上面は閉塞石の上端あたりにあたり、14層は、閉塞石から石室入口部分すべてを覆う形で存在している。閉塞石はほぼ原位置を保っており、この14層、そしてその下の15層は最終的な閉塞が行なわれた際、埋め込まれたものかもしれない。17・18層は地山である。その直上には黒褐色土が薄く堆積している（16層）。これは、この上面が石室入口部分の床面として使用されていたことを示すものであろう。なお、このトレンチにおける上層の観察からは、追葬面の確認はできなかった。

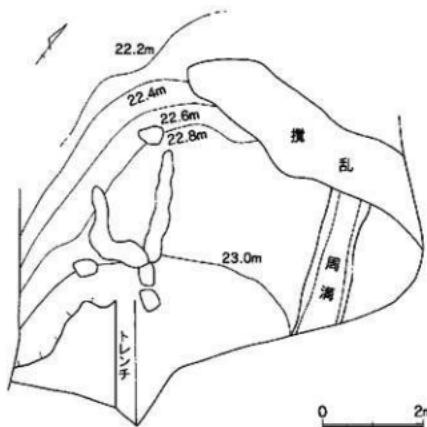
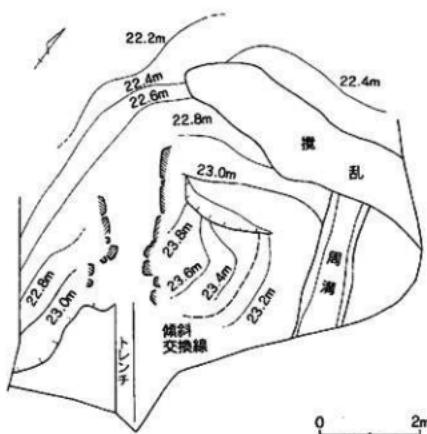


図6 墳丘造存(上)・地山整形(下)(1/100)

b. 墳丘遺存状況（図6上）

上述した各トレンチによって、墳丘の状態を確認した後、客土・流土を除去し、墳丘の遺存面を検出した。その結果、盛土の大半は流出し、墳丘は石室右側壁・前部壁側に一部、高さにして50cmほど残っているに過ぎないことが判明した。

ただ、古墳東側には、部分的にではあるが、周溝が認められた。周溝は途中で搅乱により立ち切られている為、長さ3mほどしか残っていない。その集溝は、幅0.9m、深さ30cmを測り、断面が逆台形を呈する比較的しっかりとした掘り込みを有している。周溝内からの遺物の出土はなかった。

ごく限られた所見からではあるが、以上から当墳東側の規模について考えてみたい。当墳を円墳であると想定すれば、墳丘としては、玄室中央を古墳の中心とし、周溝までの距離を半径とする円形が一つの目安となるだろう。とすれば、当古墳は径8m程の円墳と考えることができる。

なお、当墳から瓦石、埴輪等の外表施設は認められなかった。

c. 地山整形（図6下）

墳丘そして石室を撤去した後の地山の様子を示したものが図6下である。地山全体の様子をみると、地山は奥壁側、つまり北側に向かってなだらかに傾斜していることが分かる。周辺は宅地化が進み、地形は大きく改変されており、旧地形の詳しい復元は困難であるが、油山から北方に延びた丘陵は、おそらく当古墳の間近まで迫っていたものと考えられ、当古墳はその丘陵麓近くの緩斜面上に、入口を丘陵側、つまり南側に向けて、築造されていたのであろう。

すべての石室石材を撤去し、石室構築時における地川掘方の観察を行なったが、遺存していた石室石材の存在した箇所に、数センチの浅い窪みが認められたに過ぎなかった。確かに石室床面は池水の浸食を受けていたが、それを差し引いたとしても、石室構築時には日立った墓壙掘削は行なわれなかつたのだろう。

（3）主体部

a. 横穴式石室（図7・8）

玄室

当古墳の主体部は、南西方向（S-58°W）に開口する半室向袖型の横穴式石室である。この石室は、石室天井部を失っており、奥壁左側から破壊によって、奥壁は一部の石材が残っているに過ぎず、左側壁は前側を残してほぼ半ばを失っているなど、かなりの破壊を受けている。玄室長2.1m、幅は前壁側0.85m、奥壁側は1mほどであろうか、やや奥壁側の広い、縦長の長方形を呈する平面プランを持つ。使用石材は花崗岩で、玄室各壁体の最下段には、やや大きめの石材を配している。

奥壁は現在、右側半分の石積みが3段残っているに過ぎない。その石材は、左右側壁の石材に比してやや大きい。左側壁は、入口側1/2のみの石積みが残る。破壊により、石室床面の十が流れ出しており、それによって、左側壁は全体として10~20cmほどの落ち込んでおり、石積みにはいくらかの歪みをみせている。比較的良好な遺存状況を示しているのは、右側壁である。基底部には比較的大形の石材を4石配し、床面より1.3m程の高さまで、壁体が残っている。

玄門～前庭部

人口部分には、扁平な石を2段重ねて樋石とし、その上に石積みを重ねて袖部をつくり出している。樋石は1段目が1石、2段目が2石を並べており、幅は40~50cmを測る。樋石による袖部は、玄室壁体より10~20cm内側へ張り出している。その樋は40~50cmほどで、樋石の幅とほぼ等しい。玄門部は幅50~60cmを測り、高さ90cmほどの石積みが残存する。玄門袖部からは、さらに50~60cm

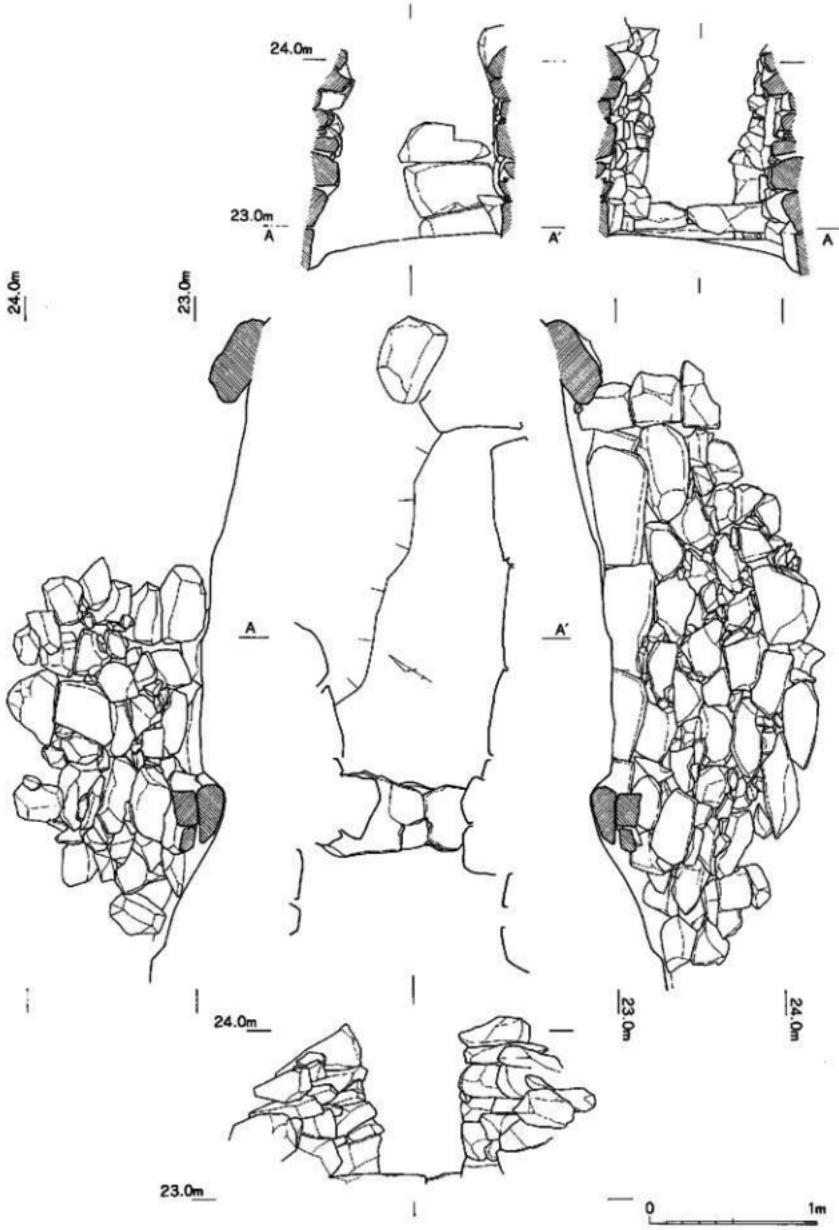


图7 主体部(1/30)

ほどの石積みが続く。石室構造から、この石積み上に天井石が架けられていたとは考えられず、この部分は前庭部と呼ぶべきであろう。幅は1.2mを計り、各壁は平行に延びている。

石室床面

前述したように、当石室は相当の破壊を受けている。現状から窺うことのできる範囲ではあるが、ここで、当古墳の横穴式石室についてまとめておきたい。水による侵食によって、床面は奥壁側へ向かって急な傾斜をみせている。しかし、最高所にあたる玄門付近の床面は、遺物の出土状況からも（後述）、比較的旧状を留めているといえ、当石室本来の床面は、標高23m付近に求めることができよう。玄室床面には、敷石等ではなく、削り出した地山を床面として使用している。その後、床面は一度、玄門部分で掘りくぼめられた後、前庭部ではゆるやかに上昇する。掘りくぼめたのは、当然框石を据えるためである。1段目の框石は大半が地中に隠れる、いわゆる埋め殺しの状態となり、框石として機能するのは2段目である。石室入口部分の土層観察により（図5）、前庭部床面の傾斜は、旧状を保っていると考えられる。前庭部より先はほぼ平坦となり、墓道などは確認されていない。前庭部上面と玄室床面との比高差は約30cmである。

石室構築過程

次に石室の石積みについて、みていくことにしたい（図8）。以下は、あくまでも調査担当者の觀察所見に基づくものであり、多分に主観的であることをお断りしておきたい。

数多くの破壊を受けており、石積みにかなりのゆがみが生じているが、それを差し引いたとしても、全体的にみて、小ぶりの石材を用い、石と石の隙間もやや立つなど、石積みは比較的荒い。良く残っている右側壁側をみると、腰石は人口に向かって、高さをやや減じながらも、その上面は揃えられている。この横目地は、框石（2段目）の上面や奥壁1段目と続いている。左側壁も全体全体の沈下がなければ、腰石の上位は同様のラインを描いたのであろうと思われる。玄室各壁における1段目石材（腰石）および、框石の設置、これが当石室の構築第1工程に相当しよう。このラインで面を整えた後、玄室2段目の石積み、そして袖部・前庭部の石積みが行なわれる（第2工程）。

第2工程は更に細かく細分が可能であろう。例えば、玄室2石目を積む際、袖部の1段目の石積みが行なわれる（2-1工程）、一部3段日の積み上げの際、前庭部側壁の築造が始まる（2-2工程）。このように、より仔細に石の積み方をみていくれば、更に細かな構築手順の復元も可能であろう。石室遺存状況は良くないため、これ以上細かい指摘は行なわないが、ただ、右側壁における横目地のあり方をみた場合、当初、入口側に傾斜していたものが（第1工程）、次第に水平となり（第2工程）、最後には、中央部が高い山形を呈するようになるという、大まかな変化をみることができる。これは石の荷重を分散させる配慮とみて良いのではないだろうか。

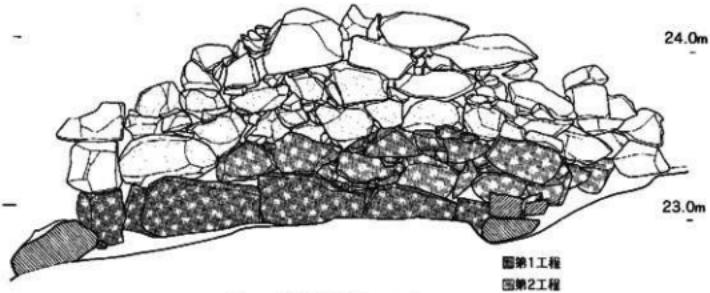


図8 石室構築過程(1/30)

b. 閉塞（図9）

当石室の入口には、閉塞石が残っていた。閉塞石は樞石の前面に据えられ、右袖部に立て掛けるように設置している。そして、閉塞石の下には、根石として2石を敷く。閉塞石には、花崗岩の一枚石を用いており、その大きさは、長さ0.8m、幅0.5m、最大厚0.3mを測る。自然の転石を利用しておらず、多くは石材の自然面を残している。だが、閉塞石の左側（左袖側）端面を中心に石材の剥落が認められ、一部加工が施されていたのかもしれない。なお、この閉塞石と左袖部とは隙間があり、その間に1石のみが、挟み込まれるように残っていた。この石材が示しているように、この隙間には、いくらか塊石が充填されたのであろう。現況からは、玄門部の天井石がどのくらいの高さに架けられていたのかは、不明であるが、閉塞石の形状をみても、その天井石と閉塞石との間に、隙間ができるのは避けられず、上段の充填と共に、この部分にも塊石がいくらか積まれていた可能性もある。だが、前庭部の埋土等、入口周辺からは、閉塞に伴ったと目されるような、塊石は出土していない。閉塞にいくらか塊石が伴ったとしても、その量はごくわずかであったのであろう。

なお、石室人口で行なったトレンチ調査では、床面の状況、閉塞石の埋土等から、追葬の痕跡を見ることが出来なかった。

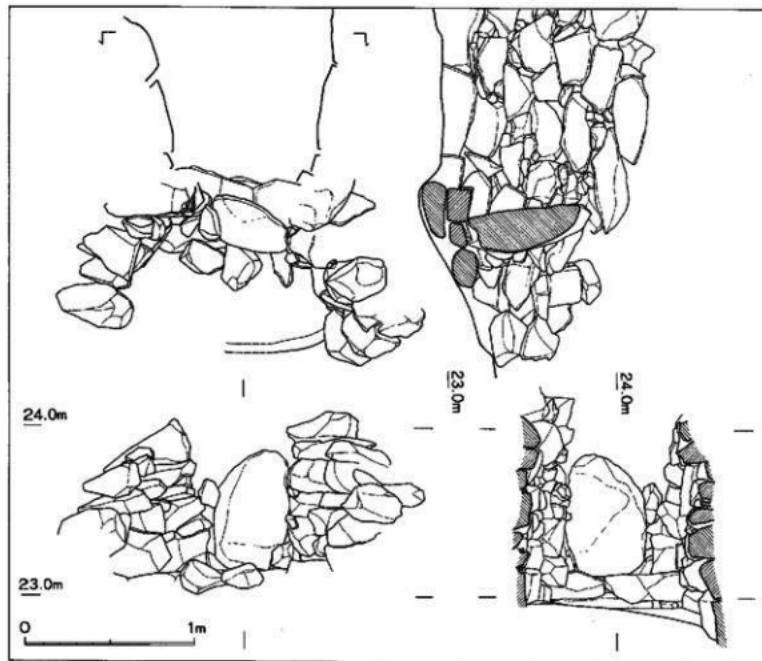


図9 閉塞(1/30)

c. 石室内遺物出土状況(図10・11)

横穴式石室内からは、次のような遺物が出土した。

須恵器：人形埴1、蓋杯3

鉄製品：刀子2、鐵鏃3

この他、縄文時代の石鏃等(図15)が出土したが、以下では、古墳時代に相当する遺物の出土状況について、述べていくこととする。

石室内の遺物出土状況は、図10に示すとおりである。石室床面上に土砂の堆積はほとんどなく、すべての遺物が地山(床面)直上で検出された。先に述べたように、池の増水時には石室内は水没しており、水の満ち引きにより、一部遺物の移動が激しい。鐵鏃3、刀子1は水の浸食による石室床面の落部に存在しており、これらの遺物は水と共に、二次的に移動しているものといえる。比較的まとまっている須恵器などに比して、鉄製品の移動は激しく、水と共に流出した鉄製品も、決して少なくはなかったものと考えられる。

一方、須恵器は右袖部隅で、まとまって存在していた。この一隅にあった遺物は、

須恵器：人形埴1(図13-7)、蓋杯2(図13-1・2、3・4)、杯蓋の破片(図13-5)

鉄製品：刀子1(図12-4)

である。鉄パイプ等現代の遺物も混入しており、人の出入による搅乱の影響が及んでいる可能性も否定できないが、袖部隅という場所は、須恵器等が一括して置かれる場所として、何ら問題のない、自然なものであり、この状況は、石室最終使用時の原位置とさして変わらぬものであると考えて大過あるまい。

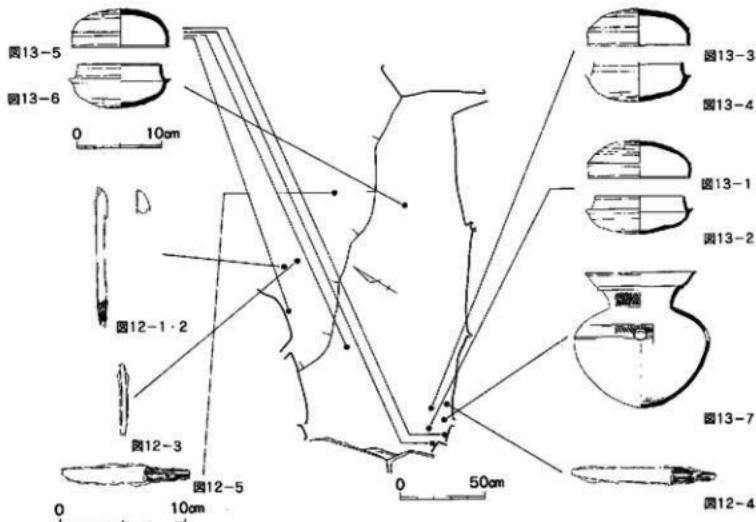


図10 石室内遺物出土状況(1)(1/30)

その配置状況は、以下のようなになる。まず左側壁に平行して蓋杯を2個体並べる。奥壁側の蓋杯（図13-3・4）は蓋と杯身がぴったりと合わさっているのに対し、前壁側のそれ（図13-1・2）は蓋がややはざれている。遺物取り上げの際、蓋杯の中を確認したが、水と共に運ばれたのであろう上砂の他、両者とも中には何も入っていなかった。前壁側蓋杯の下には、杯蓋（図13-5）の破片がある。蓋杯二個体の上には、大形の龜が置かれる。やや傾いてはいるが、口縁部を上に向ける正位で配される。

龜の下には、刀子（図12-4）、更に杯蓋（図13-5）の破片があった。比較的高所にあるために、流出を免れたのであろうか。

石室内出土の須恵器で、原位置を保っていないと考えられるのは、先の杯蓋の破片にみる蓋杯（図13-5・6）である。杯身はほぼ完形であるが、杯蓋は4片に破砕されていた。杯身そして杯蓋の破片は石室内に広く分散しており、水の満ち引きと共に、移動を繰り返していたのであろう。他の須恵器があまり水の影響を受けなかつたのは、蓋杯の上に、重量のある大形の龜を乗せるという配置にあつたといえるかもしれない。なお、遺物整理の際、破砕された須恵器杯蓋は接合の結果、ほぼ完形に復元された。この蓋杯の分布範囲は、図10で示した範囲内、つまり石室内にすべてが存在している。

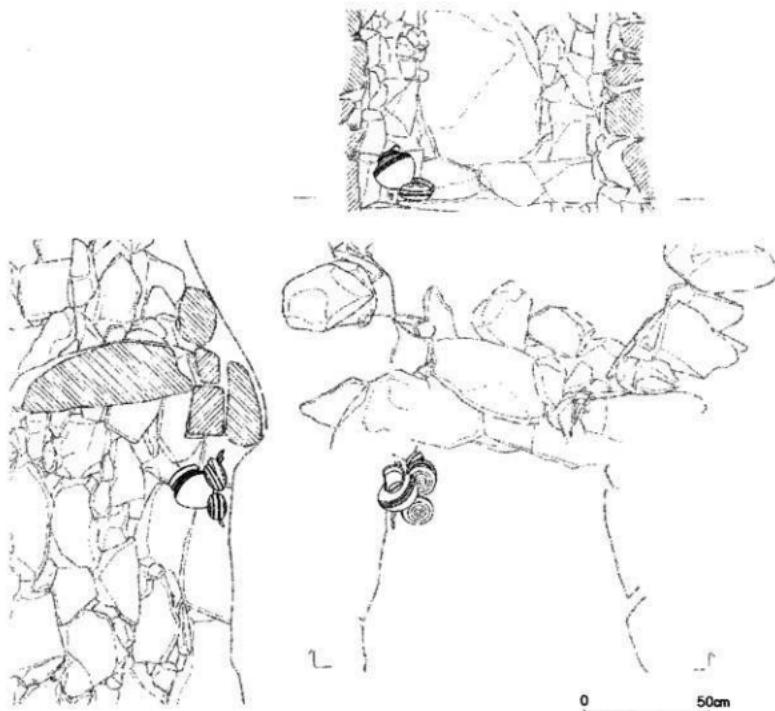


図11 石室内遺物出土状況(2)(1/20)

(4) 遺物

a. 主体部内出土遺物 (図12・13)

鉄製品 (図12)

1～3は鉄劍。いずれも長頸劍である。1は片刃劍で、劍身部と莖部の一部を欠損している。残存長は10.8cm。頸部長は7.0cm、劍身部長は3.5cmほどであろう。莖部には木質が残る。2は1と同じく片刃劍で、劍身部の先端部のみ。3は頸部片である。残存長は5.7cmを測る。4・5は刀子である。4は刀部最大幅0.8cm、残存長11.4cm、刀部長は8cmほどであろう。両闘をなし、柄部分には木質が残る。5は刀部最大幅1.3cm、残存長11.1cmを測る。両闘をなし、柄部分には木質が残る。

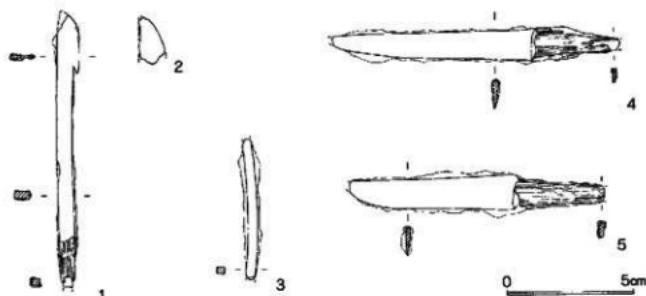


図12 石室内出土遺物(1)(1/2)

土器 (図13)

1～6は須恵器蓋杯である。出土状況、そして胎土・焼成等より、1・2、3・4、5・6はそれぞれ、セット関係にあるものと考えられる。1は杯蓋である。口径11.9cm、器高4.5cmを測る。天井部は丸みを帯び、全体の1/2～2/3に回転ヘラケズリを施す。天井部と体部との境には沈線を施し、弱い稜をなしている。体部から口縁部にかけて、更に丸みを帯びながら内傾し、端部において軽く外反する。口縁部は内傾するが、平坦にナデられ、さほど凹面をなさない。天井部内面は回転ナデ調整が施される。色調は灰白 (Hue7.5Y7/1)～灰 (Hue7.5Y5/1)で、外器面の半ばにススが付着している。2は杯身である。口径10.4cm、受部径12.6cm、器高4.4cmを測る。立ち上がりは比較的高く、内傾しており、端部は内傾した弱い段をなしている。立ち上がり内面には、弱い凹線が認められる。受部は短くやや上方に張り出し、受部下は屈曲し、体部はわずかにふくらみを有する。底部は全体の1/2ほどに回転ヘラケズリを施し、やや扁平な印象を与える。底部内面は回転ナデ調整。色調は灰白 (Hue7.5Y7/1)～灰 (Hue7.5Y5/1)で、外器面の半ばにススが付着している。3は杯蓋である。口径12.2cm、器高4.4cmを測る。天井部には、全体の2/3に回転ヘラケズリを施す。1と同様、天井部と体部との境には沈線を施し、弱い稜をなしているが、稜の上部をくぼませ、稜を更に強調している。体部から口縁部へはやや内傾しながら伸び、端部においてわずかに外反する。端部内面は、内傾する段を有する。天井部内面は、回転ナデ調整。色調は灰 (Hue7.5Y6/1)～灰オリーブ (Hue7.5Y6/2)で、外器面には自然釉が付着する。4は杯身である。口径10.4cm、受部径12.6cm、器高4.4cmを測る。立ち上がりは比較的高く、1に比してやや直立気味となる。端部は内傾し、弱い凹面をなしている。受部は短く水平気味に張り出し、端部はシャープに仕上げられている。底部は全体の2/3に回転

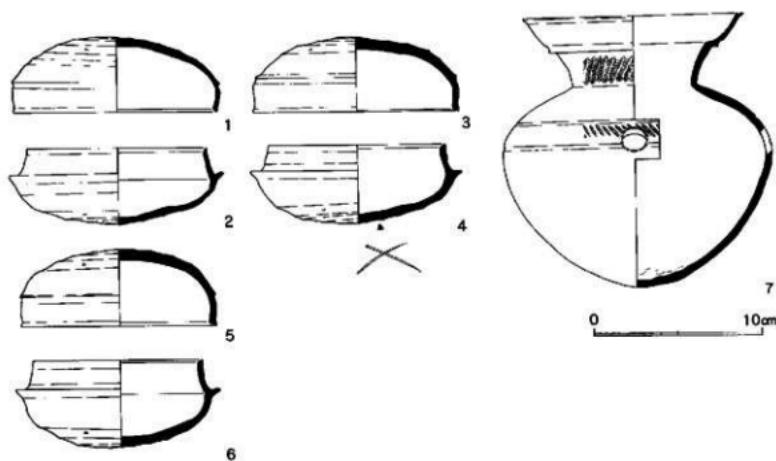


図13 石室内出土遺物(2)(1/3)

ヘラケズリを施し、「×」のヘラ記号を有する。底部内面は回転ナデ調整。色調は灰オリーブ(Hue7.5Y6/2)～灰(Hue7.5Y4/1)で、外器面には、自然釉およびススが付着している。5は杯蓋である。口径11.4cm、器高4.6cmを測る。天井部は丸みを帯び、全体の2/3に回転ヘラケズリを施す。天井部と体部との境には沈線を施し、その上部をくぼませ、弱い稜をなしている。口縁端部はわずかに外半し、内面は内傾し、弱い凹面をなす。天井部内面は、回転ナデ調整。色調は灰(Hue7.5Y6/1)～灰オリーブ(Hue7.5Y5/2)。外器面には、自然釉が厚く付着し、火ぶくれも認められる。6は杯身である。口径9.9cm、受部径12.1cm、器高5.2cmを測る。立ち上がりは比較的高く、やや直立気味。端部は内傾し、弱い段をなしている。受部は短く上方に張り出し、立ち上がりとの境には、弱い沈線が巡る。受部下はくぼみ、凹状を呈する。底部は丸みを帯び、全体の2/3に回転ヘラケズリを施す。底部内面は回転ナデ調整。色調は灰(Hue7.5Y6/1)～灰オリーブ(Hue7.5Y5/2)。口縁端部、および体部から底面にかけて自然釉が厚く付着し、火ぶくれも認められる。

7は甌である。口径(復元)13.1cm、器高16.1cm、胴部最大径16.0cm、頸部径7.3cm、口頸部高4.1cmを測り、甌でも大形の部類に属する。口頸部は外反し、半ばで屈曲して更に大きく外半する。屈曲部には鋭い凸線を巡らし、凸線と頸部との間には波状文を巡らす。頸部径は胴部最大径の1/2ほど。口縁端部は水平で、凹面をなす。胴部は中央より上方に最大径を有する。肩部には2条の沈線を巡らし、その間には刺突文を施す。胴～底部は丁寧なナデ調整を行ない、タタキ目を消している。底部内面には、棒状工具による刺突痕がある。色調は、灰オリーブ(Hue7.5Y4/2)～オリーブ黒(Hue7.5Y3/1)を呈し、焼成は良好である。

ここで、石室内出土須恵器の遺存状況について述べておきたい(図版9)。

1は口縁部の一部を欠損する。2は口縁部・受部にわずかな打ち欠きがあるのみで、ほぼ完形(図版)。3は口縁端部にわずかな打ち欠きがあるのみで、ほぼ完形。

4は完形。打ち欠き痕も無い。5は天井部のほぼ中央に、外面から打撃を加え、杯蓋を打ち割っている。口縁端部には、2箇所、打ち欠きが認められる。6は受部に1箇所打ち欠きがあるので、ほぼ完形。7は口頸部の1/2を欠く。

この内、人為的に、そして故意に打ち欠きが行なわれたと考えられるものは、杯蓋5と塵7である。これらの破壊が後世に行なわれたのか、それとも古墳祭祀の一環として行なわれたのかは、明らかでない。ただ、杯蓋5は接合によりほぼ完形に復元でき、またその破片がすべて石室内にあったという事実は、その破壊が石室内で行なわれたということを示している。塵7の口頸部片は、今回の調査で発見することができなかった。

b. 墳丘出土遺物(図14)

図14は墳丘表土・流土の掘り下げ中に出土した遺物である。1は須恵器杯蓋の天井部片である。外器面には回転ヘラケズリ、内器面は回転ナデ調整を施す。焼成良好で、灰(Hue7.5Y6/1~5/1)を呈する。2~7は須恵器塵で、2は頸部片、3~7は胴部片である。2は2条の沈線を2段施し、その間に波状文を上下に2列施文する。堅緻で、焼成は良好である。灰(Hue7.5Y6/2)~灰オリーブ(Hue7.5Y6/1)を呈する。3は外器面に平行タタキを施し、一部にナデ消しが行なわれる。内器面はナデ調整。灰(Hue7.5Y5/1)を呈する。4~6は外器面平行タタキ(疑格子)で、内器面は同心円(青海波)タタキを施すものである。4は灰(Hue7.5Y5/1)、5は灰(Hue7.5Y6/1)を呈する。6は堅緻で焼成は良好、外器面に自然釉が付着する。灰白(Hue7.5Y7/1)を呈する。7は面平行タタキで、内器面は同心円(青海波)タタキを施す。灰(Hue7.5Y5/1)を呈し、外器面の一部には、ナデの痕跡が残る。後に述べる古墳の築造時期とはやや開きのある遺物も含まれており、これら遺物が、確実に当古墳に伴うかは不明である。

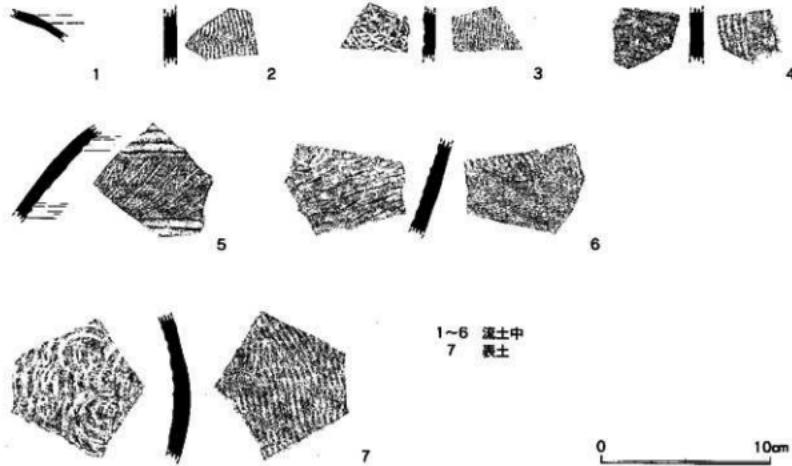


図14 墳丘出土遺物(1/3)

c. その他の時代の遺物（図15）

墳丘や石室内の調査の際、石鏃3点（図15）、弥生土器等の上器片がいくつか出土した。今回、土器は細片ばかりであり、石鏃のみ図化を行なった。

1～3は石鏃である。1は基辺に大きな抉り込みを有するもので、脚部片方を欠損する。黒曜石製で、長さ20.5mm、最大厚2.7mm、重さ0.48gを測る。墳丘表土より出土。2は下端部を一部欠損し、基部にわずかな抉りを有するものである。長さ29.5mm、幅16.0mm、最大厚3.4mm、重さ1.47gを測る。黒曜石製で、石室内より出土。3は二等辺三角形を呈するもので、基部にわずかな抉りがある。安山岩製で、長さ22.0mm、幅13.5mm、最大厚2.8mm、重さ0.68gを測る。墳丘表土掘り下げ中に出土。

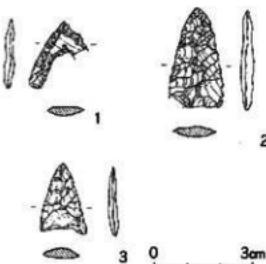


図15 その他の時代の遺物(2/3)

IV まとめ

ここでは、七隈古墳群C群1号墳の調査所見について、特記事項、問題点を列記し、まとめに代えたい。

出土須恵器について

当古墳の石室内からは、大形甕1、蓋杯3が出土した。その内、蓋杯3組は細部に細かい差異を指摘できるが、口径を含めた全体の形状そして調整等、良く似ており、同一の産地よりもたらされたと考えて良いだろう。また時期的にも、ほぼ同一時期のものとみなせるだろう。

これら須恵器を畿内陶邑編年でみれば、蓋杯はそれぞれTK47型式、大形甕はTK23型式もしくはそれ以前にあてはめることができる。このように、型式的にみれば、甕は蓋杯よりもやや古く位置付けられることになる。

また当古墳に認められた、横穴式石室などの主体部内に須恵器等の容器を副葬するという行為が一般化するのは、6世紀になってからのことで、5世紀段階におけるこれらの例はごく限られる。重藤輝行氏は、5世紀段階の主体部に土器を副葬する古墳として33例を集成したが、その内、早良平野にあるものは、梅林古墳（城南区梅林5丁目）、クエゾノ4・5号墳（城南区梅林7丁目）、羽根戸N-1号石棺（西区羽根戸）を挙げている（重藤1999）。5世紀段階に土器を副葬するという儀礼が出現する背景として、渡来人とのつながりが指摘されているが（土生田1985）、クエゾノ古墳群における半島系と目される横穴式石櫛や梅林遺跡における壁立建物（井澤編2000）の存在などは、当調査地周辺に主体部内に容器副葬を行なう古墳が数多く存在する意味を考える上でも、示唆に富むものといえよう。

横穴式石室について

当古墳の主体部である横穴式石室は、玄室長2.1m、幅約1mを測り、羨道を持たず、幅広な前庭部を有する。また、玄門部に板石を立て掛け開塞を行なっている。以上示した形態は、この石室がいわゆる「壁立式横口式石室」であることを示している。

また、当石室の特徴として、1) 穏石の使用が認められること 2) 袖部が立石ではなく、積石によるものであること の2点を挙げることができよう。早良平野において、壁立式横口式石室等の初

期横穴式石室が調査された例は少ない。いくつか例を挙げると、梅林古墳（城南区梅林5丁目）、クエゾノ5号墳（城南区梅林7丁目）、羽根戸南古墳群E-5・11・12号墳（西区羽根戸）などがある。この内、羽根戸南古墳群E-11・12号墳には腰石の使用がみられ、梅林古墳、羽根戸南古墳群E-5号墳は立石によって、袖部をつくり出している。以上、ごく限られた調査例ではあるが、当古墳周辺に2基の初期横穴式石室が存在することは注目して良いだろう。

時期について

ここで、当古墳の築造年代について、述べておきたい。須恵器では、蓋杯がTK47型式、趾をやや古く考えたが、この型式差は、殊更に追葬その他のによる副葬時期の違いとして捉える必要も無いだろう。石室自体の破壊も激しいものがあったが、閉塞部分の調査では、少なくとも明確な追葬の痕跡をみることはできなかった。よって、ここではこれら須恵器を一時に副葬されたものとして捉えることにしておく。

したがって、当古墳の築造時期は、蓋杯の時期、つまり前方後円墳集成8期後半（TK47型式期）と考えておきたい。これは石室構造等とも矛盾するものではないだろう。

七隈古墳群について

先に述べたように、七隈古墳群A群は8基の古墳で構成され、古墳時代後期を主体とする群集墳である。C群はA群と近接した位置にあるが、池（弓池）の存在からも明らかなように、C群の所在地とA群のある丘陵との間には浅い谷が存在していたものと考えられ、A群とC群は、別の支群として考えたほうが良いだろう。この両者は丘陵尾根、もしくは斜面上（A群）、丘陵裾近く（C群）という、古墳にみる占地のあり方の差としても現われている。これはそのまま時間的な差（C群→A群）としても把握できるものであろう。

文献

- 重藤輝行1999「北部九州における横穴式石室の展開」『九州における横穴式石室の導入と展開』第2回九州前方後円墳研究会資料
- 土生田純之1985「古墳出土の須恵器（一）」『末永先生米寿記念獻呈論文集』乾
- 井澤洋一編2000『梅林遺跡 第1次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第648集

図 版

図版1



七隈古墳群C群現況
(北東から)



七隈古墳群C群現況
(東から)





七隈古墳群C-1号墳
(北から)



七隈古墳群C-1号墳
(北西から)



石室内現況(奥壁側から)

図版3



1号墳埴丘土層(北西から)



1号墳埴丘土層(北東から)



1号墳石室閉塞部土層



1号墳墳丘遺存状況
(北東から)



1号墳墳丘遺存状況
(南から)



1号墳墳丘遺存状況
(南西から)



石室内遺物出土状況
(奥壁側から)



石室内右袖部隅
遺物出土状況



石室内左側壁側
遺物出土状況



1号填石室(閉塞)



1号填石室
(石室内より閉塞)



1号填石室
(前庭右袖部)



1号填石室(入口・前庭部)



1号填石室(右袖部)



1号填石室(左袖部)



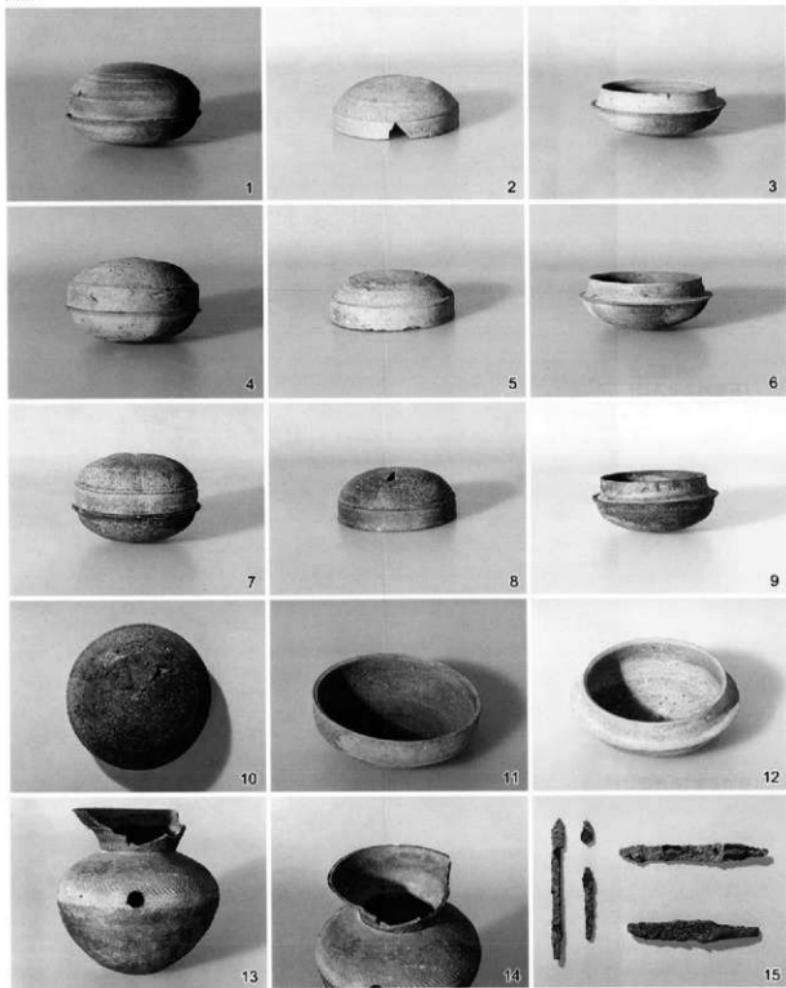
1号墳石室
(石室内より入口)



1号墳石室(右側壁)



周溝土層



出土遺物

- | | | |
|-----------|----------|----------|
| 1 図13-1・2 | 2 図13-1 | 3 図13-2 |
| 4 図13-3・4 | 5 図13-3 | 6 図13-4 |
| 7 図13-5・6 | 8 図13-5 | 9 図13-6 |
| 10 図13-5 | 11 図13-3 | 12 図13-4 |
| 13 図13-7 | 14 図13-7 | 15 図12 |

Noke
野芥遺跡第10次

本文目次

I	はじめに	31
1.	調査に至る経緯	31
2.	調査の組織	31
II	位置と環境	31
III	調査の記録	33
1.	調査の概要	33
2.	遺構	33
3.	出土遺物	35
IV	まとめ	35

挿図目次

図1	野芥遺跡群 (1/25,000)	32	図4	遺構配図 (1/200)	34
図2	野芥5・10次 (1/4000)	32	図5	溝土 sondage (1/40)	35
図3	基本層序 (1/20)	33	図6	出土遺物 (1/3)	35

図版目次

図版1	第1面 (南から)	36
	第2面 (南東から)	36

一例言一

- ・本章は福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、平成12年度（2000年9月4日～9月27日）に行なった野芥遺跡第10次調査の報告である。
- ・本章で使用した遺構実測図は、調査担当者である藏富士が行なった。
- ・本章で使用される方位は座標北である。
- ・本章の執筆・編集は藏富士が行なった。

I はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡外環状道路、そして地下鉄3号線は福岡市における交通事情を改善するものとして、現在、工事が進められている。当調査地は、500m程のごく狭い範囲ではあるが、外環状道路、地下鉄3号線双方に重複して工事の必要とされる箇所であった。そこで、福岡市教育委員会埋蔵文化財課では、試掘調査を実施し、遺跡が存在することを確認した。そして、幾度か二者による協議を重ねた後、埋蔵文化財課は、福岡国土工事事務所、および福岡市交通局と受託契約を結び、平成12年9月4日より当地点における発掘調査に着手した。

調査にあたっては、国土交通省福岡国道工事事務所、福岡北九州高速道路公社、福岡市交通局をはじめとする関係各位に、多人なる御協力を戴いた。記して感謝したい。

2. 調査の組織

調査委託	建設省（現国土交通省）九州地方建設局福岡国道工事事務所 福岡北九州高速道路公社 福岡市交通局
調査主体	福岡市教育委員会
調査総括	文化財部埋蔵文化財課 課長 山崎純男 調査第1係長 山口謙治
事前審査	埋蔵文化財課 事前審査係長 田中寿夫 濑本正志
庶務担当	文化財整備課 宮川英彦
調査担当	藤富士寛
調査作業	上野道郎 鬼塚友子 西口キミ子 西嶋和利 西嶋利規 西島マツコ 西嶋ムラ子 西嶋洋子 平田千鶴子 脇坂ミサヲ
整理作業	柴田加津子 萩本恵子 日名子節子

II 位置と環境

福岡市西南部に広がる早良平野は、東を飯倉丘陵、西を長垂丘陵に面された平野で、その中央部を北流する室見川を中心とした、大小河川の沖積作用により形成される。野芥遺跡群は、早良平野の南東側に位置し、油山から北に派生した丘陵上、及びその裾部周辺に存在する遺跡であり、その範囲は南北約1.5km、東西0.3kmと、南北に細長い広がりを持つ（図1）。旧石器時代から近世かけての複合遺跡である。

今回の調査地点は、遺跡指定範囲地の北東側にあたり、西側の隣接地では、第5次調査が行なわれている（図2）。第5次調査は1994年に実施され、計2～3面の遺構面が確認されている。第1面では、古墳時代前期～中期にかけての住居址、掘立柱建物の他、土坑、溝など、2面では、溝等が検出されたことが報告されている（山崎編1999）。

野芥遺跡群は、現在10次にわたる調査が行なわれている。遺構の密度は決して濃いものではないが、旧石器時代から近世かけての遺構、遺物が検出されている。特に4次調査では、弥生時代～中世にかけての集落が発掘され、特に古代における大形建物群の検出など、特筆すべき成果もあがっている。野芥遺跡群は、複数の時期に渡る複合遺跡であるといえよう。

中村啓太郎編1998『野芥遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第575集

山崎龍雄編1999『福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書』6 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第609集

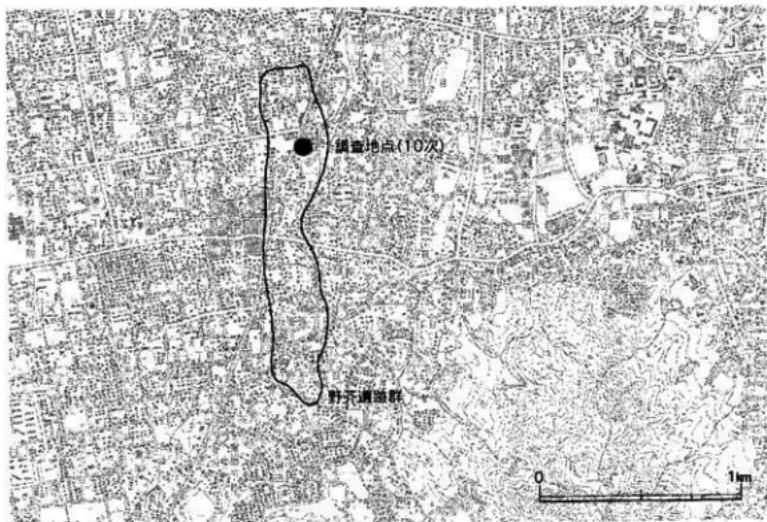


図1 野芥遺跡群(1/25,000)

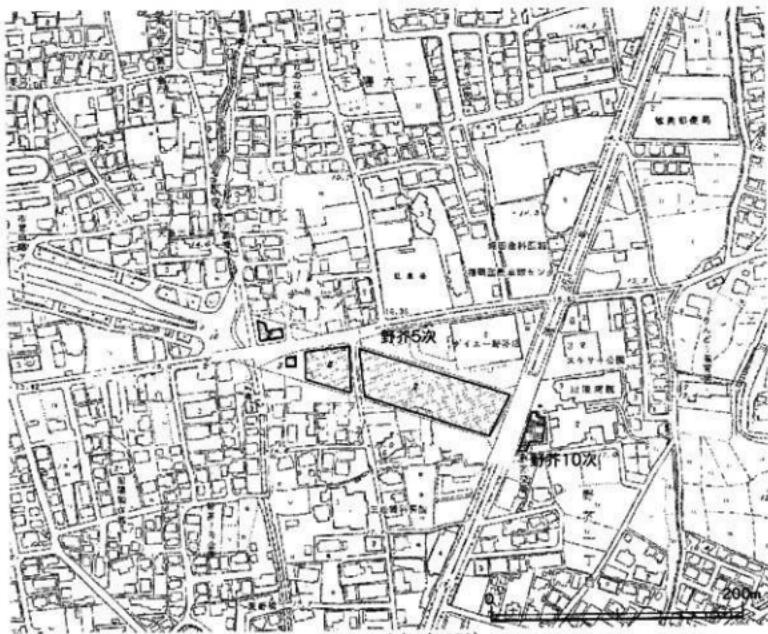


図2 野芥 5-10次(1/4,000)

III 調査の記録

1. 調査の概要(図3)

調査にあたって、当調査地は、遺構面に至るまで1m以上の掘削を伴うこと、地盤が軟弱であることから、事前に一部鋼矢板で土止めを行ない、表土掘削と同時に土砂の撤出を行なった。

遺跡の基本土層は図3のようになる。調査は、標高16.0m付近にある暗褐色砂質土(Hue5YR3/2)上面を第1面(図4)、それから50cmほど掘り下げた黒褐色砂質土(Hue7.5YR3/2)上を第2面(図4)とする、計2面の調査を行なった。

2. 遺構

(1) 第1面(図4左・5)

第1面では、溝3、ピット群が検出された。遺構は調査区の北より集中しており、南側には認められなかった。

ピットは調査区の西側に集中する。建築物の存在を思わせるような、有意な配列は示していない。ほとんど遺物を伴わないので、その所属時期は不明である。溝については、順に溝1~3とし、以下に所見を記す(図5)。

溝1

溝1は、調査区の東側を長さ19mにわたって南北方向に走る溝である。幅0.8m、深さ0.2mを測り、調査区の中央付近では、断面逆台形の比較的しっかりした掘り方を有している(図5-1・2)。溝の埋土は、上層が極暗褐色シルト土(Hue5YR2/3)、下層が黒褐色シルト土(Hue5YR3/1)で、少量ではあるが、陶器や土師皿が出土した(図6-1~5)。

しかし、溝1は、南側へ行くにつれて、次第に浅く、そして狭くなり、掘り方も判然としなくなる。それでも、深さを減じながら東側へと向かっており、本来は、調査区の東側へと統一していたのである。

溝2

溝2は、調査区の北側を長さ7mにわたって東西方向に走る溝である。幅30~40cm、深さ30cmを測るごく浅い溝で(図5-3)、西側では二股に分かれる。溝の埋土は、黒褐色シルト土(Hue7.5YR2/2)で、溝中から遺物の出土はなかった。おそらく自然の流路であると考えられる。

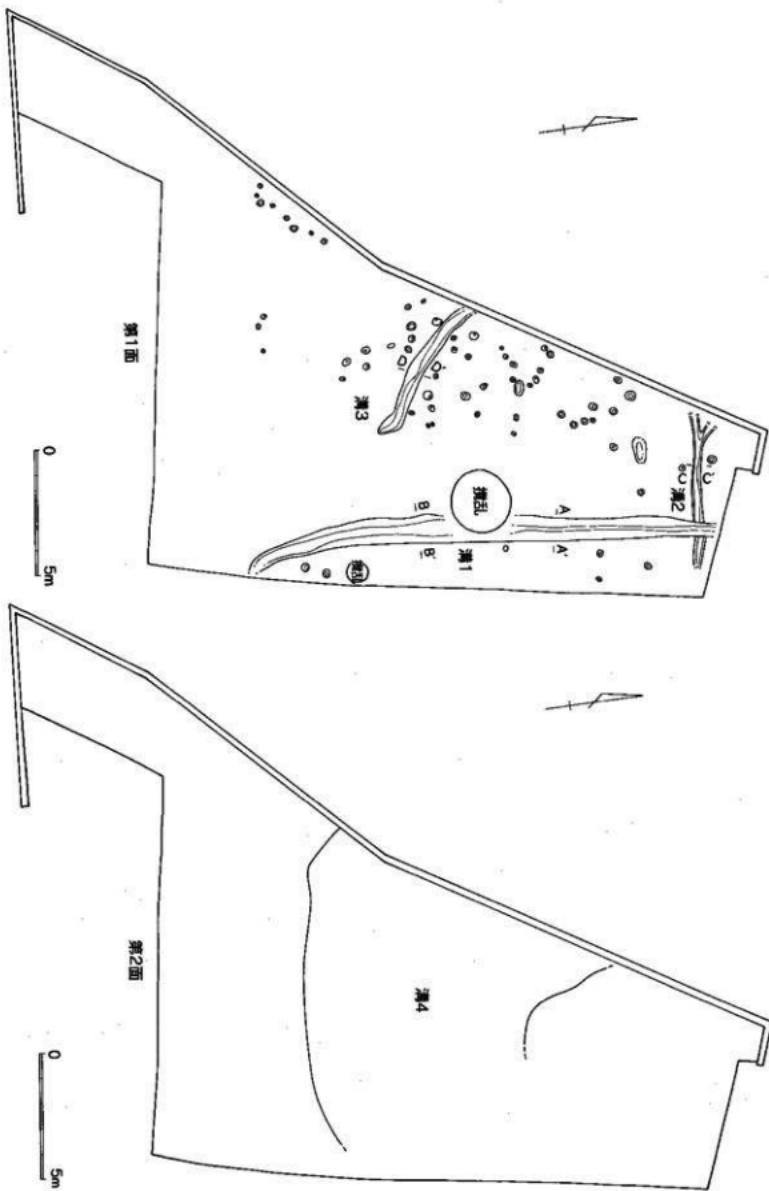
溝3

溝3は調査区の半ばを長さ6mにわたって東西方向に走る溝である。幅50cm、深さ20cmを測り、調査区中央で途切れる。比較的しっかりとした掘り込みを有している溝(図5-4)だが、東側へ行くにつれて、次第に浅くなる。溝の埋土は、上層が黒褐色シルト土(Hue7.5YR2/2)、下層が極褐色シルト土(Hue7.5YR2/3)で、溝中から遺物の出土はなかった。溝2と同じく、溝3も自然の流路であろう。



図3 基本層序(1/20)

図4 通構配置(1/200)



(2) 第2面(図4右)

第2面では、調査区中央に認められた大溝(溝4)の他、遺構は検出されなかった。遺構面からの出土遺物はない。

溝4は、発掘区の中ほどを東西方向に走る溝である。幅8~11mを測り、やや北へ向けて緩やかな弧を描く。調査面は多量の水分を含み、掘削を行なった際、壁面が崩落する危険性が高いため、溝4は車機によるトレンチ調査に留めた。

それによると、溝の深さは1.5mを測り、断面は緩やかな逆台形を呈していた。溝4内から、遺物の出土はなかった。あくまでもトレンチ調査という限られたものではあったが、その所見をみれば、溝4は何らかの人為的な「遺構」であるというより、自然の流路(小河川)であると考えるべきであろう。

3. 出土遺物

遺物の出土は第1面においてのみであり、その量も、ごく限られたものであった(図6)。図5の1~5までが、溝1出土、6~8が遺構面精査中に出土したものである。以下に所見を述べる。

1は青磁碗の高台部片である。内面底部には片切彫りの花文を描く。2は陶器碗口縁部片で、3は擂鉢底部片である。共に近世のものであろう。4・5は十師皿の底部片。共に糸切りの痕跡が残る。6~8は土師皿片で、いずれも底部に糸切りの痕跡が残る。

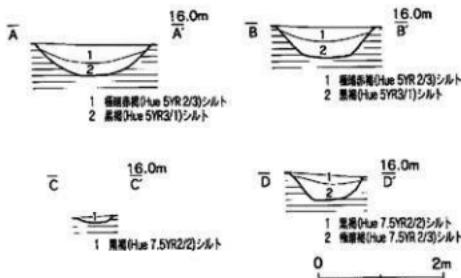


図5 溝土層(1/40)

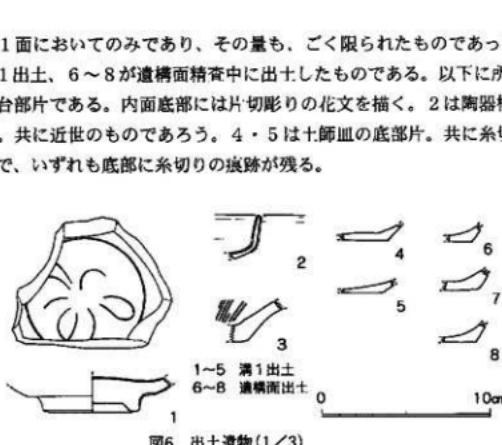


図6 出土遺物(1/3)

IV まとめ

今回の調査では、計2面の調査を行ったが、第2面では、遺物や生活址としての遺構は検出できず、第1面の遺構もさほど密度の濃いものではなかった。この結果を踏まえれば、当調査地点は野芥遺跡の縁辺にあたるといえよう。

第1・2面の調査を通じて、計4本の溝を検出し、その大半を「自然流路」と解釈した。このような溝状遺構は、他の調査地点においても認められるものであり、その性格については、野芥遺跡全体を観た上で、解釈すべきであるかもしれない。

図版1



第1面（南から）



第2面（南東から）

IIkura
飯倉 G 遺跡第 4・5 次

本文目次

I	はじめ	39
1.	調査に至る経緯	39
2.	調査の組織	39
II	位置と環境	40
III	第4次調査	43
1.	調査の概要	43
2.	遺構と遺物	43
IV	第5次調査	49
1.	調査の概要	49
2.	遺構と遺物	49
V	旧石器時代の遺物	51
VI	まとめ	55

挿図目次

図1	飯倉遺跡群位置図(明治33年) (1/30,000)	41
図2	飯倉G遺跡第4・5次調査区位置図 (1/2,000)	42
図3	第4次調査区遺構配置図 (1/300)	44
図4	SD01土層断面図 (1/40)・遺物出土状況実測図 (1/20)	45
図5	SD01出土遺物実測図 (1/2・1/3)	47
図6	SD02・03・05上層 (1/40) SK04 (1/60) SD03・SK08出土遺物実測図 (1/2・1/3)	48
図7	第5次調査区遺構配置図 (1/200)	49
図8	SD01北壁・南壁土層断面図 (1/80)	50
図9	旧石器時代遺物出土状況 (1/500)	51
図10	第4次調査区出土旧石器時代遺物実測図① (2/3)	52
図11	第5次調査区出土旧石器時代遺物実測図② (2/3)	53
図12	SD01復元図 (1/2,000)	56

図版目次

図版1	(1) 飯倉G遺跡遠景(西から) (2) 飯倉G遺跡遠景(南から)	
図版2	(1) 第4次調査区全景(南東から) (2) 第4次調査区全景(真上から)	
図版3	(1) SD01土層①(南東から) (2) 須恵器出土状況(真上から) (3) 弥生土器⑩出土状況(南東から) (4) 土師器⑪出土状況(真上から) (5) 土師器⑫出土状況(南東から)	
図版4	(1) SD01南東側(真上から) (2) SD02(北から) (3) SD03(北から) (4) SD05土層(南東から) (5) SK04(南東から)	
図版5	(1) 第5次調査区全景(真上から) (2) SD01(東から)	
図版6	(1) SD01北壁土層(南から) (2) SD01南壁土層(北から)	
図版7	第4次調査出土遺物	
図版8	第4・5次調査出土遺物(縮尺2/3)	

I はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡外環状道路は、昭和44年に都市計画決定された、井尻柏屋線・井尻姪浜線である。平成元年より国七交通省福岡国道工事事務所から福岡市教育委員会に福岡外環状道路建設予定地内、福重～月隈間16.2 kmに関して文化財事前審査申請書が提出された。これを受けた埋蔵文化財課では試掘可能な箇所について随時試掘調査を行った。この試掘の結果、遺跡を確認した箇所については協議を行い、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。また、福岡市交通局は福岡市中央区・西部地区において地下鉄3号線建設を築港より西区橋本迄延長させることを決定した。これを受けて本市教育委員会は平成8年度より試掘調査を行い、同様に遺跡を確認した箇所については協議を行い、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

当該地は、外環状道路第III工区の東端部に位置し、福岡市交通局事業の地下鉄第3号線建設予定地域でもある。試掘調査を行った結果、飯倉G遺跡を確認したため協議を行い、福岡国道工事事務所、福岡市交通局、福岡北九州高速道路公社と福岡市教育委員会の受託契約によって発掘調査を実施することとなった。第4次調査は平成11年3月9日から同年4月27日まで、第5次調査は平成11年5月24日から同年6月10日まで行った。

2. 調査の組織

調査委託 国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所

福岡北九州高速道路公社

福岡市交通局

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課 課長 山崎純男 第一係長 二宮忠司（前任）山口謙治

庶務担当 埋蔵文化財課第一係 木原順二（前任） 文化財整備課 宮川英彦

事前審査 埋蔵文化財課事前審査係長 田中寿夫

同課事前審査係 宮井善朗 中村啓太郎（前任） 瀧本正志

調査担当 埋蔵文化財課第一係 加藤隆也 早野恵美

一例言一

- 1 本章は福岡外環状道路・福岡市営地下鉄3号線建設に伴い平成11年度に福岡市教育委員会が実施した飯倉G遺跡第4・5次調査の発掘調査報告書である。

2	次数	調査番号	遺跡略号	所在地	調査面積	調査期間
	4次	9964	IKRG-4	城南区梅林4丁目414-1	600m ²	990309～990427
	5次	9962	IKRG-5	城南区梅林5丁目137-1	170m ²	990524～990610

3 遺構の実測は加藤隆也、早野恵美、上野道郎、樋崎直子、井出ト真一が行った。

4 遺構写真的撮影は加藤、星野が行い、全景写真を朝日航洋に委託した。

5 遺物の実測は星野が行い、旧石器時代の石器に関しては吉留秀敏が行った。

6 遺物写真的撮影は星野が行った。

7 製図は林山紀子、熊養久美子、星野が行った。

8 本章で用いた方位は磁北で、真北より6°21'西偏する。

9 遺構の呼称は溝をSD、土坑をSKと略記化した。

10 遺構・遺物番号は通し番号とした。なお、坪岡中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。

11 本章に開わる記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。

12 本章の執筆は旧石器については吉留が、それ以外は星野が行った。

II 位置と環境

遺跡の位置する早良平野は福岡市の南西部に当たり、東側を油山山塊、西側を飯盛・長垂山山塊、南側を背振山脈で区切られている。平野の中央には背振山脈に源を発する室見川が北流し、博多湾に注いでいる。平野内には幾つかの洪積台地も点在するが、その大部分は室見川を中心とした河川の沖積作用によって形成されている。

飯倉遺跡群はこの早良平野の東側にある飯倉低丘陵上に立地する。飯倉丘陵は標高600mを測る油山山塊から北へ細長く延びる低丘陵群の一番西側の丘陵で、標高30~10mと南から北へ高さを次第に減していく。この丘陵は早良花崗岩を基盤としている。丘陵はさらに小河川によって開析され、東や西方向に枝状に舌状台地を分岐しており、数多くの遺跡が点在している。

飯倉遺跡群はこの丘陵に立地する遺跡の総称で、丘陵の舌状部をA群からH群に分けているが、地形的な隔絶部ではなく、便宜上の区分である。また、遺跡地内は丘陵上の宅地化が昭和30年代から進み、実際の遺跡群の単位の把握は困難となっている。明治33年の地形図からも宅地造成による開削で、旧状を留めていないのを見て取ることができる。飯倉G遺跡は、飯倉遺跡群の最も南側に位置する。

今回調査を行った第1・5次調査地点は飯倉G遺跡のほぼ中央、丘陵上とその東斜面に立地している。第4次調査では遺跡がさらに東側へ伸びていることを確認した。また、東隣の丘陵に立地している七隈古墳群A群との間の狭い台地上にも、古墳時代を中心とした集落である梅林遺跡が調査されている。昭和53年の分布調査時にはこのような遺跡の実体は明らかでなかったが、近年の道路建設、宅地開発、公園建設に伴う緊急発掘の増加で、その様相は次第に明らかになりつつある。

飯倉遺跡周辺では、旧石器時代から各時代の遺跡が点在している。旧石器時代ではカルメル修道院内遺跡で尖頭器が採集され、飯倉E・F遺跡からナイフ型石器が出土している。また、柏原遺跡群、千段熊添遺跡、神松寺遺跡、五ヶ村池からもナイフ形石器・尖頭器・細石器が出土している。後期旧石器時代の遺物が油山山塊から延びる丘陵上に点々と見られる。縄文時代になると飯倉E遺跡・G遺跡から前期の曾畠式土器が出土している。東側、樋井川上流の柏原遺跡では草創期から早期にかけての住居跡群や集石炉が検出され、多くの柏原式土器、撚糸文土器、条痕灰土器、押形文土器、石器群が出土し、拠点的様相を呈している。しかし、前期から晩期にかけての資料は少ない。一方で、西側の早良平野では後期末から晩期にかけて遺跡がほぼ平野全体に拡大し、晩期から弥生時代前期前半にかけても沖積地に水稲耕作を基盤とした集落が多数現れている。弥生時代に入ると資料もしだいに増加する。飯倉唐木遺跡では前期末の壹柏墓から細形銅劍・碧玉管玉が、中期後葉の壹柏墓からは素環頭鉄刀が出土している。弥生時代後期には飯倉E遺跡で33基の土壙墓群が、G遺跡では木棺墓、石蓋土壙墓、土壙墓各1基が確認されている。木棺墓からは小型彷製鏡や鐵刀子が出土している。しかし、平野部や室見川西岸部とはその量、質ともに違いが認められる。集落では飯倉C遺跡で中期後半期の住居跡、集落を囲む可能性がある周溝が検出されている。飯倉D遺跡では住居埋土中から銅鏡鑄型が出土している。古墳時代には飯倉F遺跡で前期の住居跡が、G遺跡では後期の住居跡・建物が確認されている。油山山麓には小円墳からなる群集墳が多く造られるが、飯倉丘陵上ではD群を除き、いずれも単独墳である。また、首長墓として梅林古墳が丘陵西側に築かれる。古代から中世にかけて千隈丘陵では隈添池周辺を中心に製鉄跡が古くから知られていたが、飯倉G遺跡では平安時代の鍛冶炉が確認され、同時に土壙墓も検出されている。飯倉F遺跡では奈良時代の住居跡、C遺跡では奈良時代から中世の掘立柱建物が検出され、飯倉E遺跡では中世末の火葬墓が調査されている。



図1 飯倉遺跡群位置図(明治33年)(1/30,000)

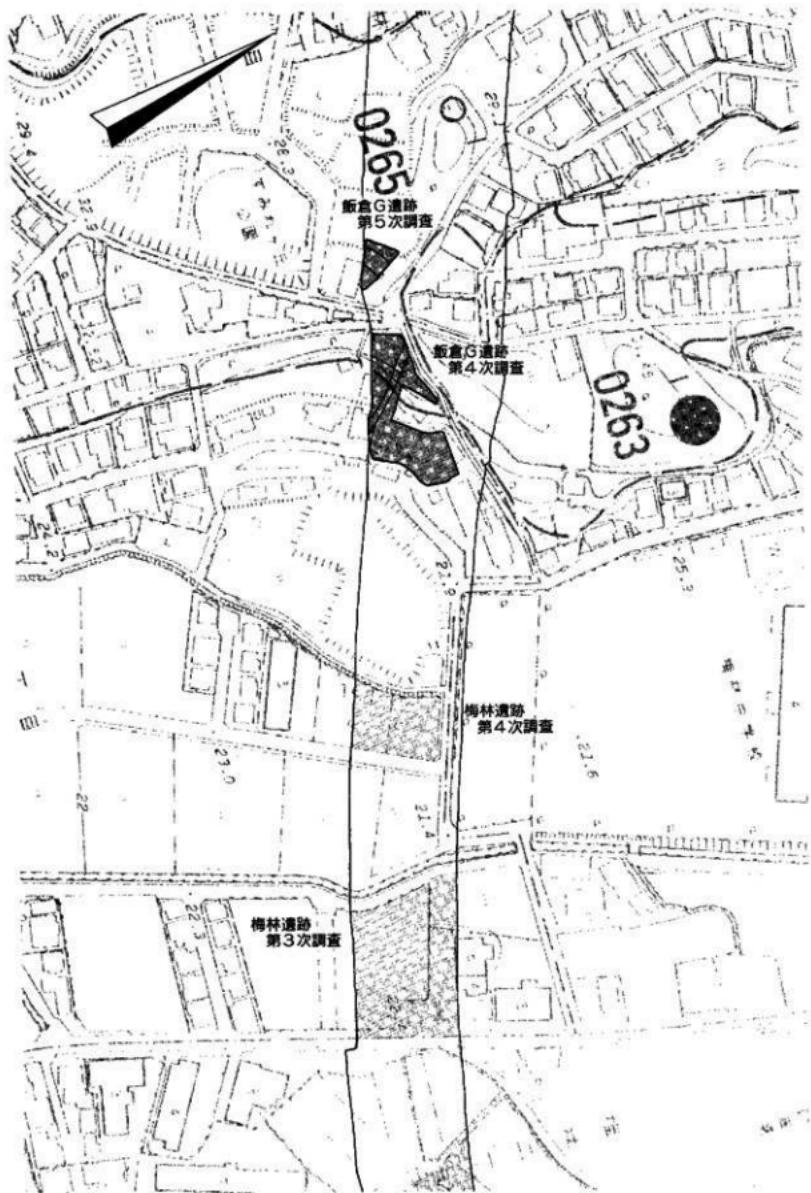


図2 梅林G道路第4・5次調査区位置図(1/2,000)

III 第4次調査

1. 調査の概要

調査区は丘陵の東斜面に位置する。斜面は西側が最も高く標高32m、東側では標高23mを測る。遺構面も西側と東側では異なり、西側では表土直下で検出される。東側では約2m~4mの盛土、その下に表土、褐色粘質土、黄褐色粘質土が堆積し、遺構は黄褐色粘質土から掘削されている。斜面を下ると、幅10m程の浅い谷があり、その谷をはさんで東側には梅林遺跡第2次調査で発見されたオンドル構造の住居をもつ集落が立地する。

主な遺構は溝が4条（SD01・SD02・SD03・SD05）、土坑が1基（SK04）、ピット状を呈した風倒木痕である。風倒木痕からは黒曜石製の石鏃・黒曜石片が出土している。遺構の埋土中、風倒木痕から旧石器時代の遺物が出土しているが、まとめて後述する。

2. 遺構と遺物

(1) 溝

SD01（図4、図版3・4）

調査区の東斜面の南東から北西方向に走っている溝で長さ約34mを検出した。南側でやや南北方向に緩い弧を描いている。大きな削平を受けていることも考えられるが、溝の規模は西側では広く、深くなり、東側では狭く、浅くなる。現存で幅は西側が4m、東側が2.5mを測る。深さは西側が最も深く5m、東側では1.75mを測る。溝の底は幅40cmと狭くなり、断面はY字状を呈する。溝内の埋土は大きく4区分できる。黒色土より上の最上層、黒色土の上層、にぶい黄色土を主体とした中層、黄色粘質土を主体とした下層の4層である。最上層から中層は自然堆積を呈し、土が黒色化している部分もあり、徐々に埋まつた様相を呈している。上層の6・7・8層（①）と10・11・12・13・14層（②）は黒色を呈しており、この時期は安定していた状況が窺える。長期間堆積の状況を呈していたと考えられる。溝の上層では古墳時代の須恵器・土師器、弥生土器、石製の紡錘車・錐が出土している。特に（②）の最下層では土師器の壺の完形品、拳大の石と須恵器がまとめて出土している（図4）。何らかの祭祀を行った可能性が考えられる。中層からは弥生時代の無頭壺、石鏃が出土している。溝の掘削時期はこの時期に近いと考えられる。下層は花崗岩や粘土ブロックが塊で堆積し、一気に埋まつた状況を呈している。最下層には粗砂も堆積しており、水の流れた状況が確認できる。常時、水が溜まっていた状況は呈していない。

他にSD01の上層で混入と考えられる後期旧石器時代の石核が1点、黒曜石片が2点出土した。

出土遺物（図5、図版7・8）

1~10は須恵器、11~14は土師器、15~17は弥生土器である。出土状況は最上層から5・6・20、上層の黒色土中から1~4・7~14・16・17・19、この中の1・2・7は拳大の石とまとめて出土したものである。中層から15・18が出土している。

1~6は壺身である。1~4は口径12cm前後を測り、これに比して5・6は口径10cm前後と小さい。1は底部に焼き膨れがあり、2・3・6は焼き歪んでいる。1~3は口縁部は長く、ゆるく外反する。5mm大の白色砂粒を多く含み、1・2の色調は内面は灰色、外面は灰黒色、3の内面は灰色、外面は灰黄色を呈する。4は1~3と比べ胎土は精良で、灰色を呈し、焼成は良好である。口縁部は短く、内傾する。5・6は5mm大の白色砂粒を多く含み、5の外面は灰黄色、他は灰色を呈する。6は内面にヘラ記号を有する。7・8は壺である。7は口径13.6cmを測り、天井付近に1条の沈線を巡らす。口縁端部内面には、内傾する段を有している。白色砂粒を含み、灰色を呈する。8のつまみは低く扁平で、その基部径は太い。5mm大の白色砂粒を多く含み、胎土は粗雑である。灰色を呈する。9は無

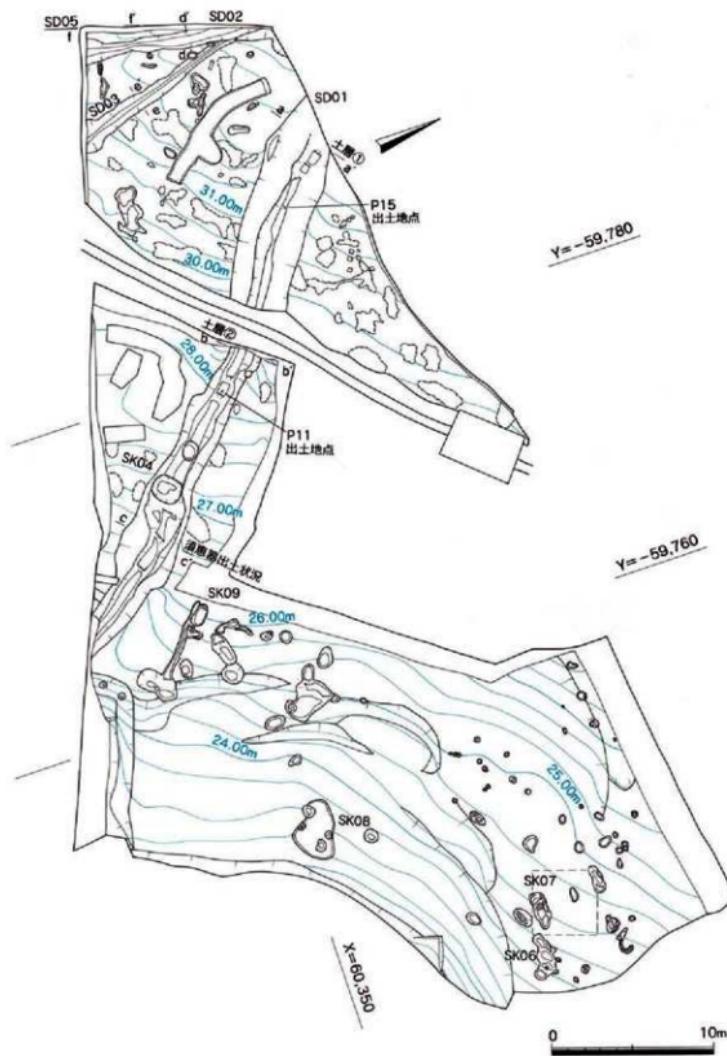


図3 第4次調査区遺構配置図(1/300)

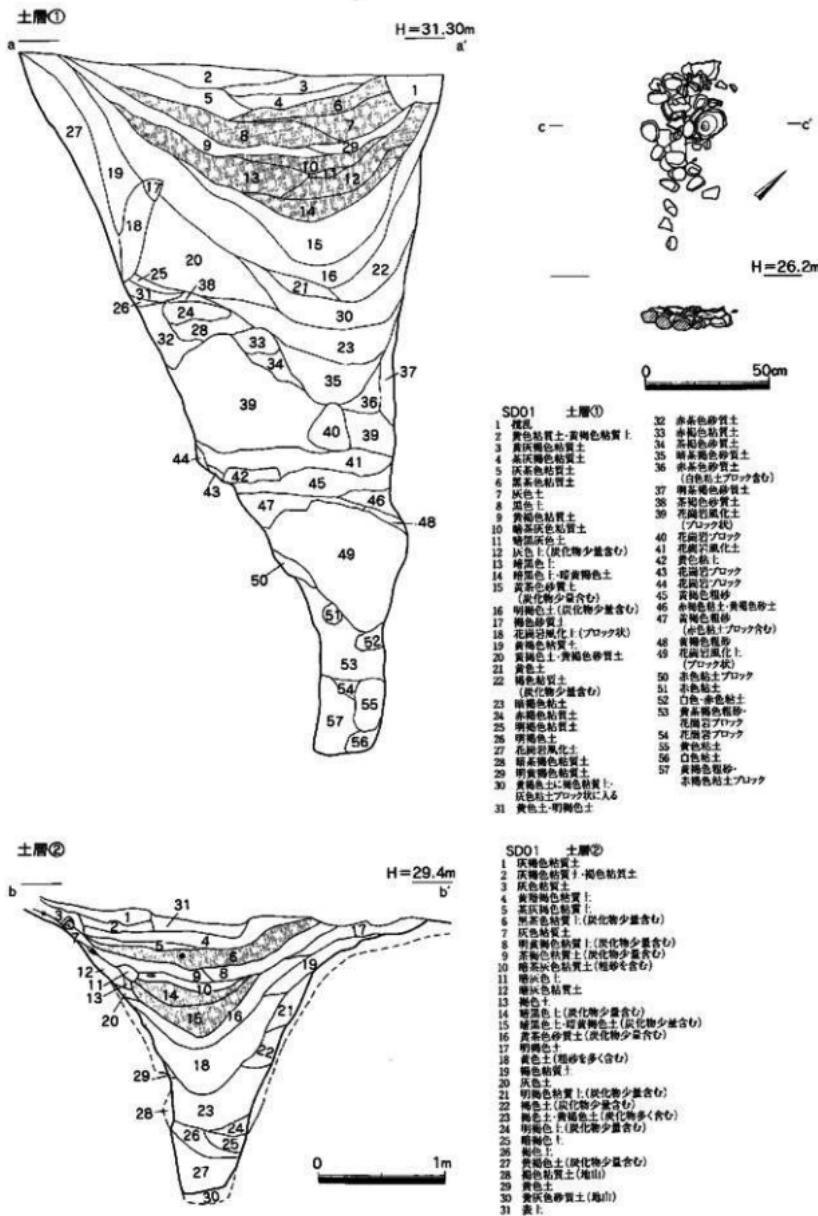


図4 SD01土層断面図(1/40)・遺物出土状況実測図(1/20)

蓋高坏の坏身で、白色砂粒を少量含み、灰色を呈する。口縁部は外反し、外面には1条の凸線を巡らす。底部には1条の沈線が巡り、凸線と沈線の間には刺突文を施している。10は有蓋高坏で、坏部は口径12.5cm、器高3.5cmと浅い。脚部は基部が太く、ラッパ状に開き、脚底径は11.2cmと坏部の口径に近い。11は二重口縁壺で、扁球状の胴部から頸部が短く外反して外面に1条の凸線をもち、その上に外反する口縁上半部を有したものである。口縁端部内側は、緩い段を有する。底部は径3cmの小さな凸レンズ状の名残を残している。口縁部はヨコナデ、胴部は外面が細い刷毛目を部分的にナデで消し、内面はヘラケズリを行っている。細かい白色砂粒をわずかに含み、橙色を呈し、外面には黒斑がみられる。12は布留窓の口縁部片である。口縁はやや内湾気味に外傾し、端部内面にはゆるい段を有する。口縁部はヨコナデ、胴部内面はヘラケズリで調整している。胎土は白色砂粒を少々含み、浅黄橙色を呈する。外面には煤の付着がみられる。13は高坏の基部である。白色砂粒を多く含み、浅黄橙色を呈する。14は瓶の把手である。15は無頬壺で、胴の張る体部に、短く外反する口縁部を有する。底部はやや上底気味である。口縁部はヨコナデ、体部はナデで調整している。胎土には赤褐色粒・白色砂粒を含み、内外面ともに明黄褐色を呈する。口縁部内面から外面にかけては、赤色顔料が付着している。16・17は弥生上器の底部で、底径は共に6.8cmを測る。5mm大の白色砂粒を多く含み、器面は磨滅している。16は浅黄橙色、17は黄橙色を呈する。

18は黒曜石製の石鏃で、黒色土上出である。長さ2.9cm、幅1.55cm、厚さ0.45cm、重量1.737gを測る。基部上部に突起が対象に付く。19は滑石製の紡錘車である。上端径3.4cm、下端径4.0cm、厚さ1.85cmを測る。断面は円錐台形を呈し、側面は縦方向、横方向に研磨し、稜線を有する。20は滑石製の石鏃で、上層の黒色土から出土した。一部欠損しているが、長さ7.6cm、幅5.5cm、厚さ2.6cmを測る。中央に一条の沈線が入る。丁寧に研磨されている。

SD02(図6、図版4)

調査区の西側をやや南北方向に走る溝である。幅約1m、深さは南側で48cm、北側にむかって徐々に浅くなりわずか4cmを測る。断面はU字形を呈する。遺物は出土していない。

SD03(図6、図版4)

調査区の西側をほぼ南北方向に走る溝である。SD02に切られている。溝の規模はSD02に類似している。南側は木の根により搅乱を受けている。北側で幅50cm、深さ15cm南側で幅約1m、深さ50cmを測る。断面はU字形を呈する。遺物は須恵器の器台が1点出土している。時期は古墳時代中期である。出土遺物(図6、図版7)

21は須恵器の器台脚部片である。復元径は10.4cmを測り、円筒形を呈する。体部には上下方を沈線状に下げるによって凸線を巡らしている。凸線によって界された文様帶には柳描波状文が施されている。文様帶には、長方形を呈した3方向のスカシ窓が、縦方向に刻まれている。

SD05(図6、図版4)

調査区の南西隅の壁に溝状を呈した十層が見られ、東西方向に走る溝と考えられる。トレンチや木の根により搅乱を受けている為、平面形は不明である。断面はJ字形を呈する。SD02との関係は不明である。

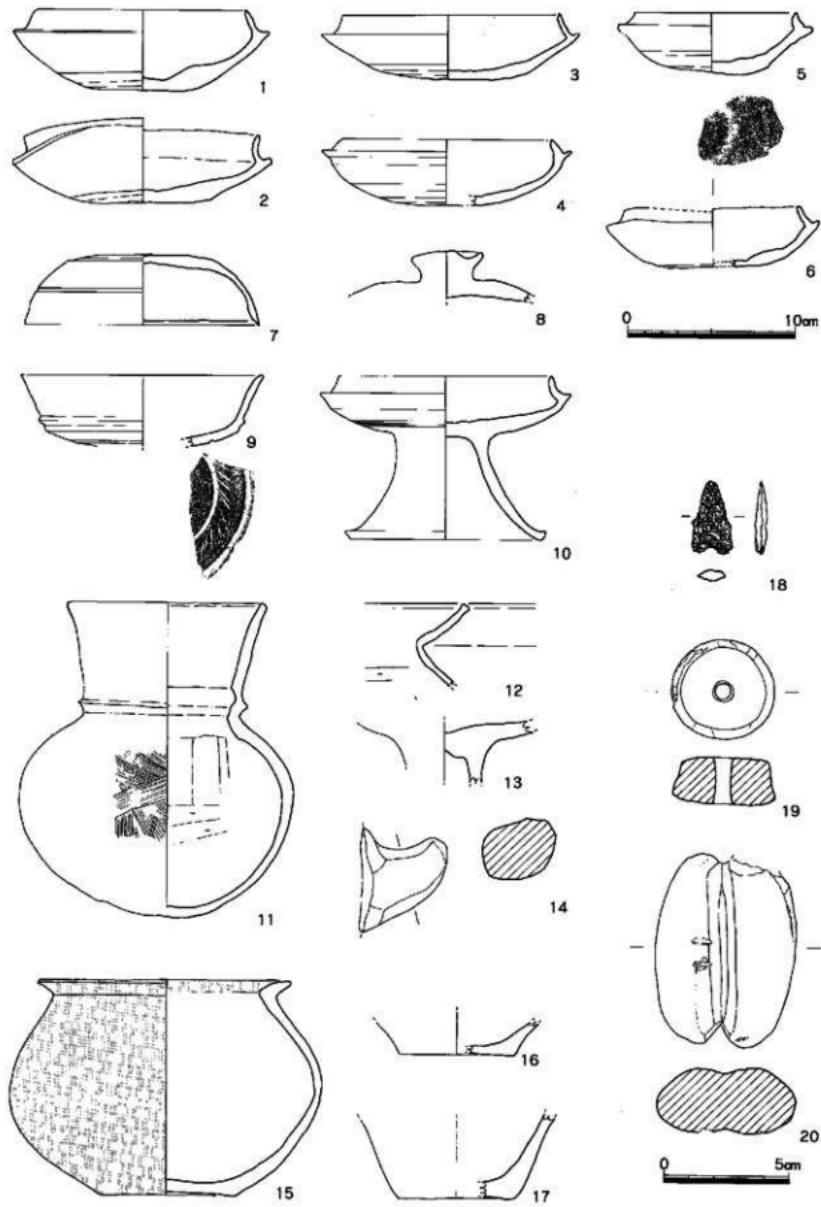


圖5 SD01出土遺物米測圖(1/2 · 1/3)

(2) 土坑

SK04 (図6、図版4)

調査区の中央に位置し、SD01を切っている。上層は黒色上で炭化物をわずかに含む。下層は炭化物が塊で入り、黄色上でやや黒味を帯びる。壁面は焼け、赤変している。かなり燃焼したため黄化している部分もある。長さ1.8m、幅1.6m、深さ60cmを測る。遺物は出土していない。

SK06 (図3)

調査区の東側に位置し、不整形を呈し、底部は凸凹状を呈する。風倒木痕と考えられる。最も深い部分で約40cmを測る。黒曜石片2点が出土している。

SK07 (図3)

調査区の東側に位置し、東西方向に長い楕円形を呈する。底部はSK06と同様、凸凹状を呈し、風倒木痕と考えられる。最も深い部分で約50cmを測る。黒曜石片1点が出土している。

SK08 (図3)

調査区の東側に位置し、東西方向に長い歪んだ楕円形を呈する。深さは3~5cmを測る。サヌカイト製の石鏃が1点出土している。

出土遺物 (図6、図版8)

22はサヌカイト製の石鏃で、上端が欠損している。凹基式で、脚は短く開く。長さ1.78cm、幅1.15cm、厚さ0.45cm、重量0.721gを測る。

SK09 (図3)

調査区の東側に位置し、東西方向に長い楕円形を呈する。深さは30cmを測り、底は凸凹状を呈する。風倒木痕と考えられる。黒曜石片が1点出土している。

(3) その他の出上遺物

SD01から後期旧石器時代の石核が出土したため、調査区内にグリットを設定し、掘削をおこなった。グリットはあまり削平を受けていないと考えられる西側に設定した。黒曜石片3点が出土したが、遺構等は確認できなかった。遺物は「V 旧石器時代の遺物」で後述する。

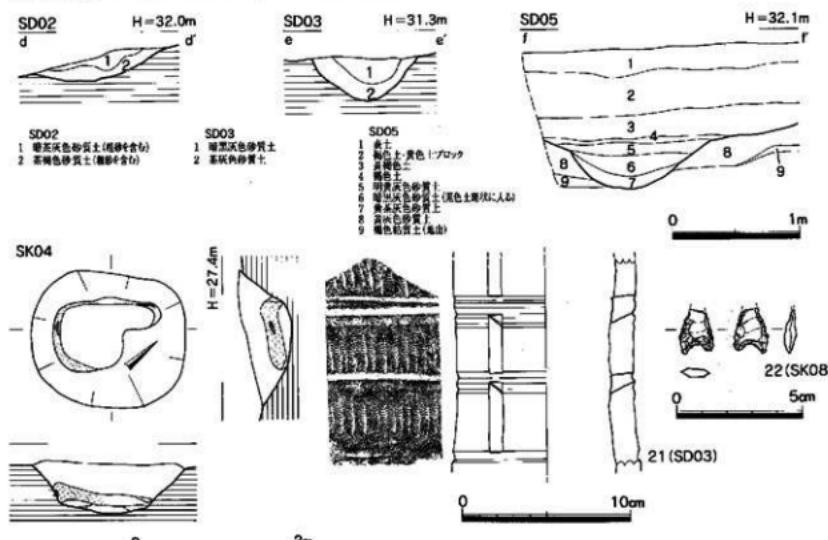


図6 SD02-03-05土層(1/40)、SK04(1/60)、SD03・SK08出土遺物実測図(1/2・1/3)

IV 第5次調査

1. 調査の概要

調査区は丘陵の頂部に位置する。標高は32m前後である。基本層序は上から表土、褐色土、黒色土、黄灰色土、黒色土、褐色粘質土（地山）である。遺構は表土から1m程の褐色粘質土からの掘削である。遺構面は溝に向かって緩やかに傾斜し、遺構は溝1条、ピット状を呈した風倒木痕である。

2. 遺構と遺物

（1）溝

SD01（図7・8、図版5・6）

溝は第4次調査で検出したSD01に続く溝と考えられる。第4次調査区で東斜面を南東から北西に走り、南側で緩やかに弧を描いていた溝は、第5次調査区である丘陵頂部で南北へと弧を描くように曲がる。長さ約9mを検出した。現存で幅は約7~8mと広くなっている。深さは北東側で2.2mを測るが、南側では約90cmと急激に浅くなっている。その先に陸橋がある可能性が考えられる。溝の断面はU字状を呈する。北側の土層から、溝の埋土は上層が粘質土を主体としているため、堅く締まっている。第4次調査とくらべて、花崗岩風化土がブロック状で入っている状況は見られない。下層では粘土と砂の互層が見られるなど水が流れた状況を呈している。また、溝が埋まっては再び掘られていく状況が最低4回は土層から見られる。但しこの掘り直しの溝の掘削が自然によるものか、人工的なもののかは不明である。調査区南側の土層でも溝が再掘削されている状況が見られる。また、溝の上層にある11層は赤橙色粘土と黄色粘質土にブロック状に黄灰黑色砂が入り、整地している可能性もある。遺物は黒曜石片が数点出土したのみである。

この溝では第4次調査区で多く出土した古墳時代の遺物は出土しなかった。第5次調査区の基本層序で3層目の黒色土、5層目の黒色土は第4次調査区の溝の埋土と類似した様相を呈している。出土遺物が黒曜石片5点であった為、時期を確認することはできなかった。

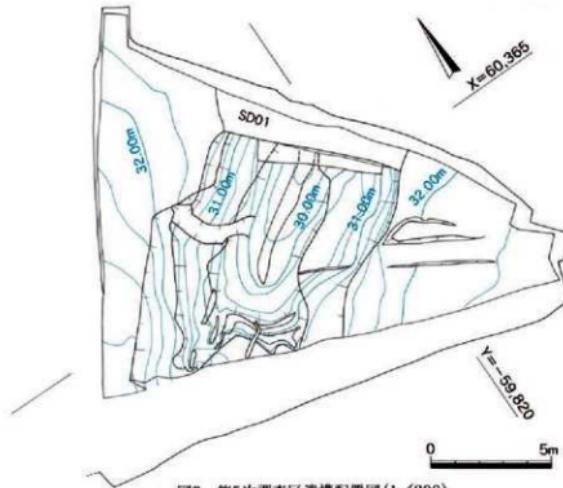
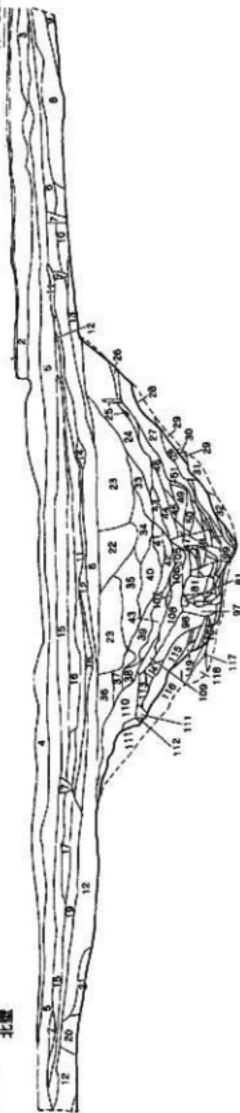


図7 第5次調査区遺構配置図(1/200)

H=33.0m



南壁

H=33.0m

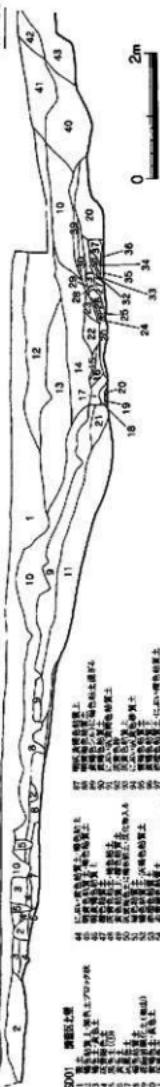


图8 SD01北壁·南壁土层断面图(1/80)

V 旧石器時代の遺物

1.出土状況(図9)

弥生時代標識や土壤などから旧石器時代の所産とみられる石器類の出土がみられた。調査区内は基盤である花崗岩バイランナ上部に僅かな風化土壌がみられる程度の堆積状況である。しかし、部分的にレスー風化火山灰層の堆積があり、とくに4次調査SK06,07付近では、遺構内や周辺から少量の剥片類が出土し、旧石器時代調査区の設定をおこなった。しかし、それ以上の石器などの出土ではなく、包含層は既に失われたものと判断した。以下では4次、5次調査で川土した旧石器時代の石器類について報告する。

なお、4次調査では9点、5次調査では5点の石器類が出上したが、ほとんどが後世の遺構内からの川土である(図9)。本来の遺構や包含層を遊離し、二次的に埋没したものと考えられる。ただし、4次調査の遺物24・26・28の3点は旧石器時代調査区において出土した。この遺物より下層での遺物の出土はなく、付近での風化火山灰層の下部に当たることから本来の石器群集中分布地点の最下部が僅かに遺存していたと考えられる。周囲の土壤SK06から出土した25とSK07から出土した29は全体として径約6~7mの範囲内となり、これらの5点の石器類は本来同一の集中分布に含まれていた可能性が高い。

また4次調査内の残る4点の石器類はSD01南半と隣接する土壤SK09からの川土である。これらは径約8mの範囲内となり、ひとつの平面的なまとまりをなす。以上の2つのまとまりは約2.5m離れており、別の集中範囲をなしている。それぞれの一括性に問題は残るが、ここでは前者をA群、後者をB群とする。なお、5次調査の石器類は全て標識内からの出土である。むろん原位置を遊離したものであるが、B群から約50m離れており、別の石器群(C群)の一部と把握できる。

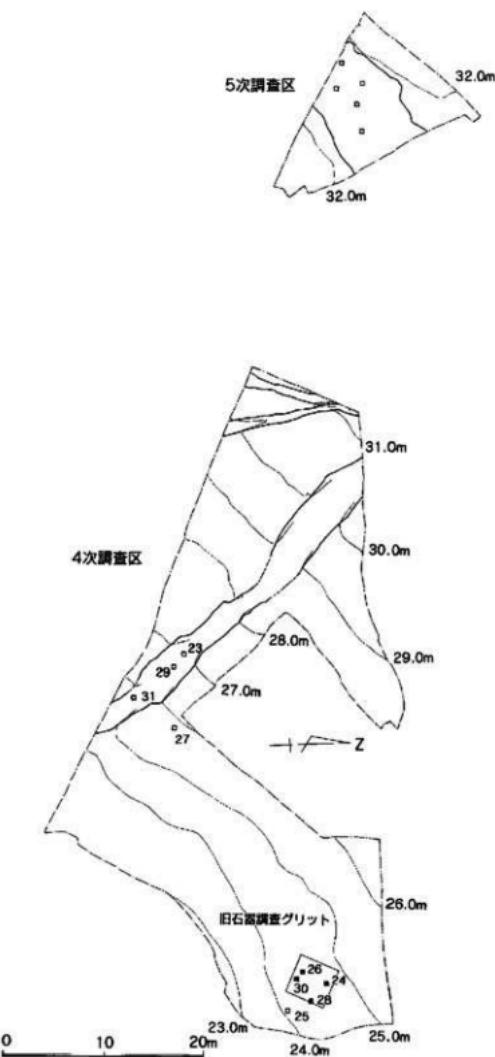
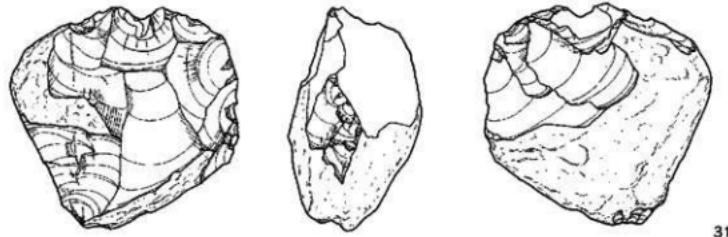
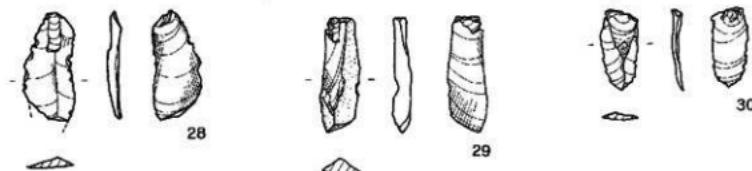
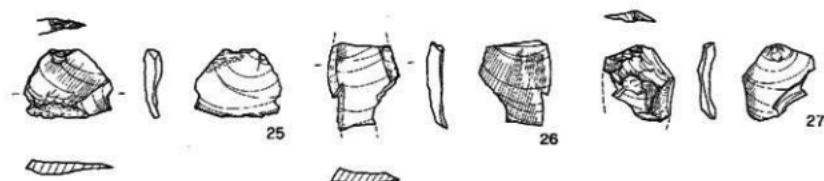
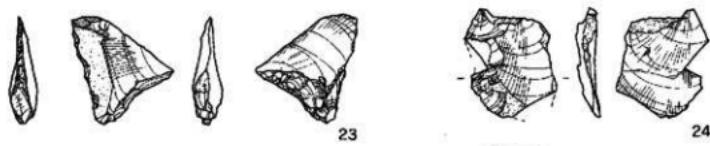


図9 旧石器時代遺物出土状況(1/500)



0 5cm

図10 第4次調査区出土旧石器時代遺物実測図① (2/3)

2. 出土遺物 (図10・11、図版8)

A群：24は縦長剥片である。弱透明黒色の黒曜石を素材とし、背面や側縁、打面の一部に自然面が残る。自然面は凹凸のある角礫状である。打点部は衝撃により鋸けている。打面単設の幅広の縦長剥片であり、先行して数回の剥離が行われている。本剥片は石核調整の後半か剥離作業初期の産物と考えられる。二次調整はない。長さ3.2cm、幅2.7cm、厚さ0.5cm、重さ4.2gである。25は不定形横長剥片である。弱透明黒色の黒曜石を素材とし、背面や側縁の一部に自然面が残る。自然面は凹凸のある角礫状であり、24と同一石材と見られる。打面は入念な調整がみられる。背面の剥離は軸が45～70°ほど振れている。本剥片も石核調整の後半か剥離作業初期の剥離と考えられる。二次調整はない。長さ2.0cm、幅2.5cm、厚さ0.5cm、重さ2.1gである。26は微細剥離のある縦長剥片である。黒色不透明の黒曜石を素材とし、背面の一部に自然面が残る。凹凸のない平坦面であり腰岳産と見られる。基部と先端を欠損している。二次調整はないが、右側縁に刃こぼれ状の微細剥離がある。長さ2.6cm、幅2.1cm、厚さ0.5cm、重さ2.1gである。28は微細剥離のある縦長剥片である。黒色半透明の黒曜石を素材とする。打面単設であり、基部と先端を僅かに欠損している。二次調整はないが、両側縁に刃こぼれ状の微細剥離がある。長さ3.3cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ1.3gである。30は小型の縦長剥片である。黒色半透明の黒曜石を素材とする。単設で平坦打面であり、作業面調整がみられる。二次調整はない。長さ2.4cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ0.5gである。

B群：23は台形様石器である。弱透明黒色の黒曜石を素材とする。素材剥片は寸詰まりの縦長剥片か。背面には平滑な自然面がある。二次調整はまず両側に折断様の荒割を行い、その後主剥離面側から背つぶしを施す。主剥離面の打瘤付近は側縁からの平坦剥離が行われている。刃部は主軸に対して斜行し、刃こぼれ状の微細剥離がある。長さ3.2cm、幅3.0cm、厚さ0.9cm、重さ4.6gである。27は不定形剥片である。黒色半透明の黒曜石を素材とする。打面は剥離面である。背面は約90°振った二

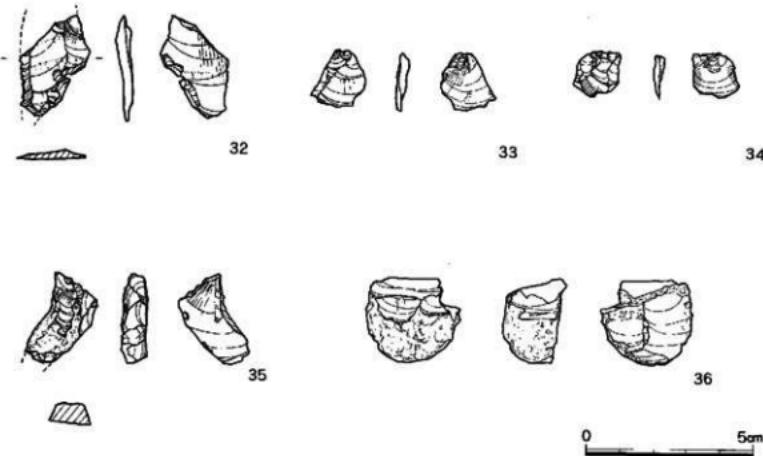


図11 第5次調査区出土旧石器時代遺物実測図② (2/3)

方向からの剥離面で構成される。本剥片は打面転移直後の剥片か調整剥片とみられる。先端部は古く欠損し、二次調整はない。長さ2.3cm、幅2.1cm、厚さ0.3cm、重さ1.6gである。29は小型の縦長剥片である。漆黒色の黒曜石を素材とする。背面には平滑な自然面があり、豊岳産黒曜石とみられる。単設打面であり、作業面調整がみられる。角礫の稜部を取り込む剥片剥離初期のものであり二次調整はない。長さ3.4cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm、重さ1.6gである。31は石核である。石材は瑪瑙に類似する珪岩質の円礫である。自然面は光沢のある黄褐色を呈し、剥離面は黄灰色の厚いパティナが覆う。調査時のキズにみられる本来の色調は暗褐～青灰色である。打面は作業面側からの1～5回の大剥離と、打撃部の小剥離により構成される。右側縁には打面側からの石核調整がみられる。剥片剥離は縦長を基調とし、上部から3枚の剥片剥離が見られるが、最後の一枚は階段状剥離となっている。打角は70°前後とやや急角である。なお、石核下端からの剥離は、打点の潰れや剥離面の特徴から剥片剥離ではなく、上方からの剥離の際に台石との間で生じた偶発的剥離とみられる。すなわち本石核は入念な打面調整を有する単設打面石核であり、剥離作業初期階で作業を停止したものといえる。高さ6.6cm、幅6.7cm、厚さ3.9cm、重さ153.6gである。

C群：32は縦長剥片である。弱透明黒色の黒曜石を素材とする。打面単設であり、二次調整はなく上下両端を欠損する。長さ2.9cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm、重さ1.7gである。33は不定形碎片である。弱透明黒色の黒曜石を素材とする。打点は潰れている。背面は2～3の剥離面で構成され、その稜部に微打痕が残されている。本剥片は打面調整時に剥出された碎片とみられる。二次調整はない。長さ1.7cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.6gである。34は不定形碎片である。弱透明黒色の黒曜石を素材とする。打点は一剥離面である。背面は10以上の小微剥離面で構成される。本碎片も打面調整時の碎片とみられる。長さ1.3cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.4gである。35は微細剥離のある不定形剥片である。漆黒色黒曜石を素材とし、背面の一部に自然面が残る。僅かに凹凸がある円礫面があり半田産と見られる。基部と先端を欠損している。初期の石核調整剥片とみられ、打点は潰れる。右側縁は折断状の剥離面であるが、二次調整かは不明。右側の折断状剥離面と主要剥離面で形成された直角に近い刃縁部に刃こぼれ状の微細剥離がある。先端を調査時に欠損する。長さ2.6cm、幅2.1cm、厚さ0.7cm、重さ3.8gである。36は石核（分割礫）である。漆黒色黒曜石を素材とし、背面～側面に自然面が残る。凹凸がある円礫である。調査時に打面部にガジリが生じた。打面は円礫の初打撃による剥出面である。作業面には一部に自然面が有り、分割面か、節理面を剥離したものと考えられる。高さ2.5cm、幅2.7cm、厚さ1.9cm、重さ11.7gである。

3.まとめ

飯倉G遺跡4、5次調査の旧石器時代資料は、出土状況からA～C群に区分され、それぞれ石器群のごく一部だけが抽出された。何れも西北九州産黒曜石を主とし、1点の珪岩製石核を含んでいる。A群は剥片（微細剥離有含む）、調整剥片など5点からなり、同一母岩を含み、打面単設、縦長剥片剥離がある。B群は、台形様石器、剥片、石核の4点からなる。縦長・不定形剥片剥離がある。C群は剥片（微細剥離有含む）、調整時の碎片、分割礫の5点からなり、入念な打面調整を施す打面単設、縦長剥片剥離が予測できた。A、C群では群内での石器製作が予測できるが、B群は単独資料が多く石器製作以外の性格もありうる。これらの石器群の時期は資料の少なさから判断に苦しむ。B群における台形様石器は、折断面を一部残し平坦剥離を併用する調整手法や素材形態などから「枝去木型」「原ノ辻型」と異なり、熊本県山野遺跡、耳切遺跡第1文化層資料との共通点がある。A、C群における縦長剥片剥離技術も、AT下位に類例の多い手法である。以上の点から、A～C群の石器群は本来AT下位の層順にあり、後期旧石器時代前半期に位置付けられる資料と考えられる。

VI まとめ

今回の飯倉G遺跡第4・5次調査では、旧石器時代から古墳時代にかけての遺構、遺物を検出した。主要な遺構は、これまで確認されていなかった弥生時代の中期後半の環濠（SD01）である。

第4・5次調査地点は、ほぼ尾根の中央部であることが現況で確認できる。また、明治33年の地図（図1）からは南から延びてきた丘陵が北東・北西方向へと分岐する付け根に調査地点が位置することが窺える。北側・東側・西側には谷が入り、狭い丘陵の頂部と東斜面に環濠は巡る。（図12）

SD01は第4次調査地点で東斜面を南東から北西に走り、第5次調査地点である丘陵頂部で南北へと弧を描くように曲がる。また、第4次調査地点の南側部分ではやや西側にカーブしている。南側に谷が入ることからも、SD01は南側部分で南北方向に曲がっていくと考えられる。ここで南北方向の径がおよそ70mと推定できる。東西方向の規模であるが宅地化が進み、旧来の地形を残していないため現状では推定不可能である。次に溝の深さであるが、最も深い部分で5mを測る。溝の下層は粘土と砂が互層になり、水の流れた痕跡が伺える。雨水に抉られ、本来の深さよりも深くなった可能性が大きいと考えられる。第5次調査地点では、水の流れた痕跡と埋没しては掘削された状況が明瞭である。また、土層①（図4）では、下層部分にブロック状の花崗岩が入り、急激に埋まった状況を呈している。ブロック状の花崗岩は環濠の内側から入り込んだ様相を呈し、内側に土壌を築いていた可能性が考えられる。但し、この状況は環濠全体に見られるものではなく、第4次調査地点の北側に一部見られる。第5次調査地点の西側では、他の地点と比べて、溝の幅は広くなり、急激に浅くなっている。大きく削平をうけていることを考慮に入れても、溝の立上がりは急である。この西側部分に環濠の出入口としての陸橋の存在が考えられる。以上のことからSD01は丘陵の先端部を巡り、東西方向は不明であるが、南北方向は70± α mの楕円形の平面プランに復元でき、第5次調査地点の西側には陸橋、部分的に環濠の内側に土壌の可能性が想定できる。溝の内部は宅地化に伴い、かなりの削平を受け、環濠内に住居跡・土坑等の遺構は検出できなかった。環濠は下層から出土した無頸蓋から弥生時代中期後半頃、一気にある程度埋まり、古墳時代後期迄徐々に埋没している。

飯倉遺跡群では飯倉E遺跡で弥生時代後期の土壙墓群が検出されている以外はC・F・G・H遺跡で埋葬遺構が点在している。集落に関しては飯倉C遺跡で竪穴住居跡と溝が検出されているにすぎない。ただし、この溝は丘陵斜面に北西方向に向い、舌状に延び、だらだらと立ち上っている。最大幅は3.5m、最大深0.75mを測り、断面U字形を呈する溝で、確認長は11.5mであるが、集落を取り囲んでいた溝の可能性がある。弥生時代後期後半の土器が溝底から出土している。この遺跡の南側にも谷が入り、頂部から丘陵斜面にかけて溝を築く方法はG遺跡のものと類似している。

近年の発掘調査により飯倉遺跡群が位置する七隈川流域、東側の樋井川流域でも弥生時代の遺跡が見つかっている。これまで、福岡平野・早良平野の中でもこれらの地域は弥生時代の遺構が希薄なところであった。樋井川流域の樋井川A遺跡で弥生時代後期の環溝が検出されている。丘陵の先端に造られ多量の土器が廃棄されていた。樋井川流域は守台遺跡・長尾遺跡・樋井川A遺跡で集落の連続を見ることができる。一方、七隈川流域では今回飯倉G遺跡で弥生中期後半の環濠が検出されたことにより、一つの弥生時代集落が確認できた。また、前期末から後期にかけて墓地群が七隈川流域でも確認されていることからも樋井川とは別の集落の存在が伺える。これは古墳時代の樋井川流域と七隈川流域でそれぞれ展開される集落に繋がっていくものと考えられる。

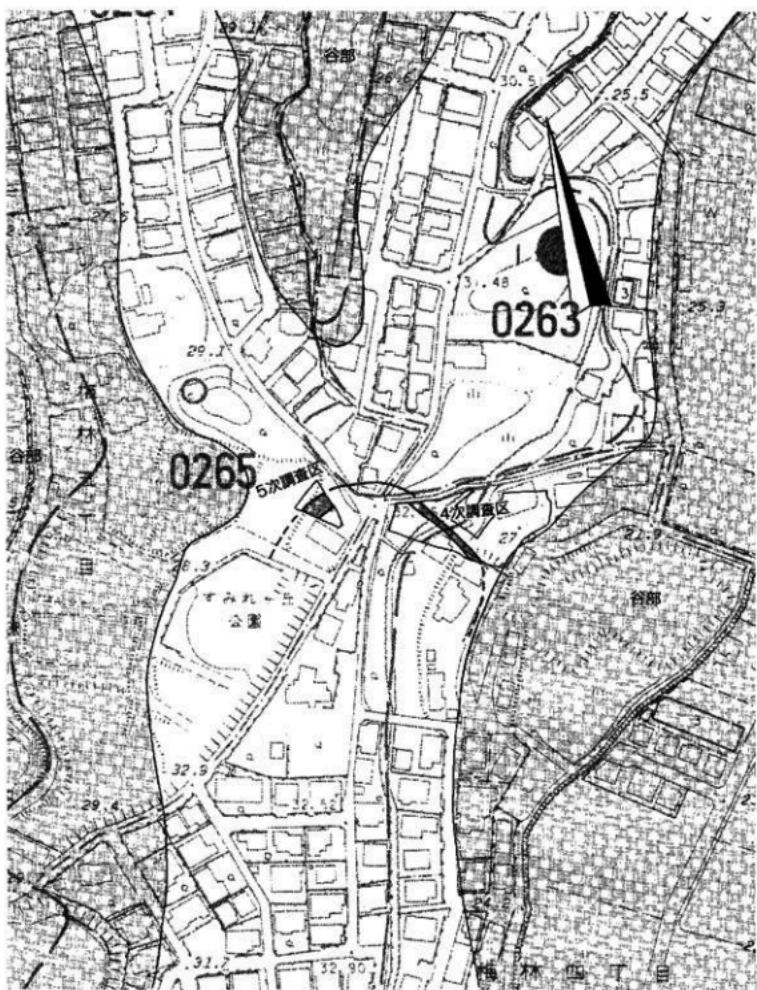


図12 SD01復元図(1/2,000)

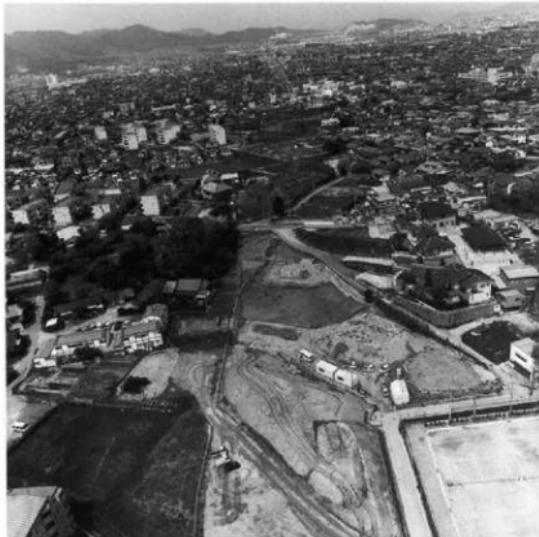


(1) 飯倉G遺跡遠景（西から）



(2) 飯倉G遺跡遠景（南から）

図版2



(1) 第4次調査区全景（南東から）



(2) 第4次調査区全景（真上から）



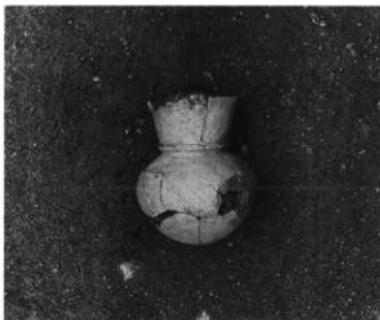
(1) SD01土層①（南東から）



(2) 須恵器出土状況（真上から）



(3) 弥生土器②出土状況（南東から）



(4) 土師器①出土状況（真上から）



(5) 土師器②出土状況（南東から）

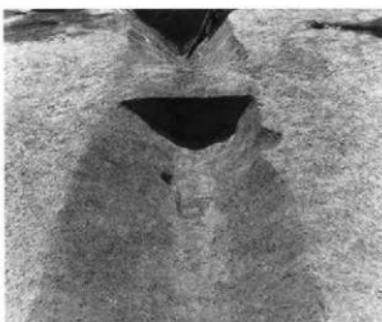
図版4



(1) SD01南東側（真上から）



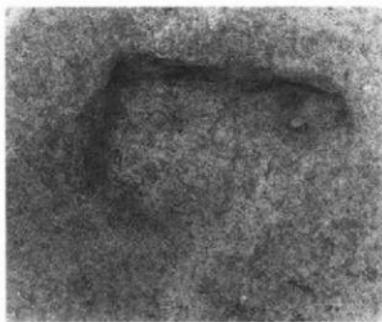
(2) SD02（北から）



(3) SD03（北から）



(4) SD05土層（南東から）



(5) SK04（南東から）



(1) 第5次調査区全景（真上から）



(2) SD01（東から）

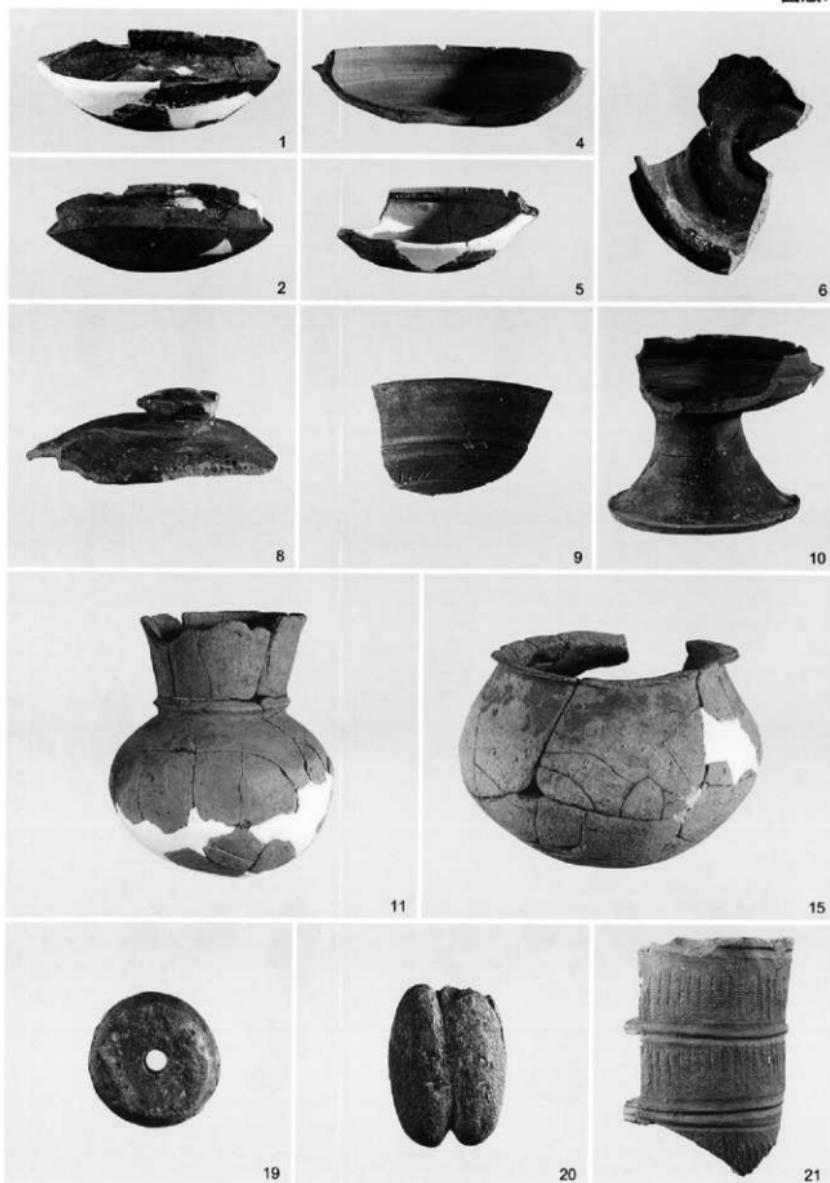
図版6



(1) SD01北壁土層（南から）

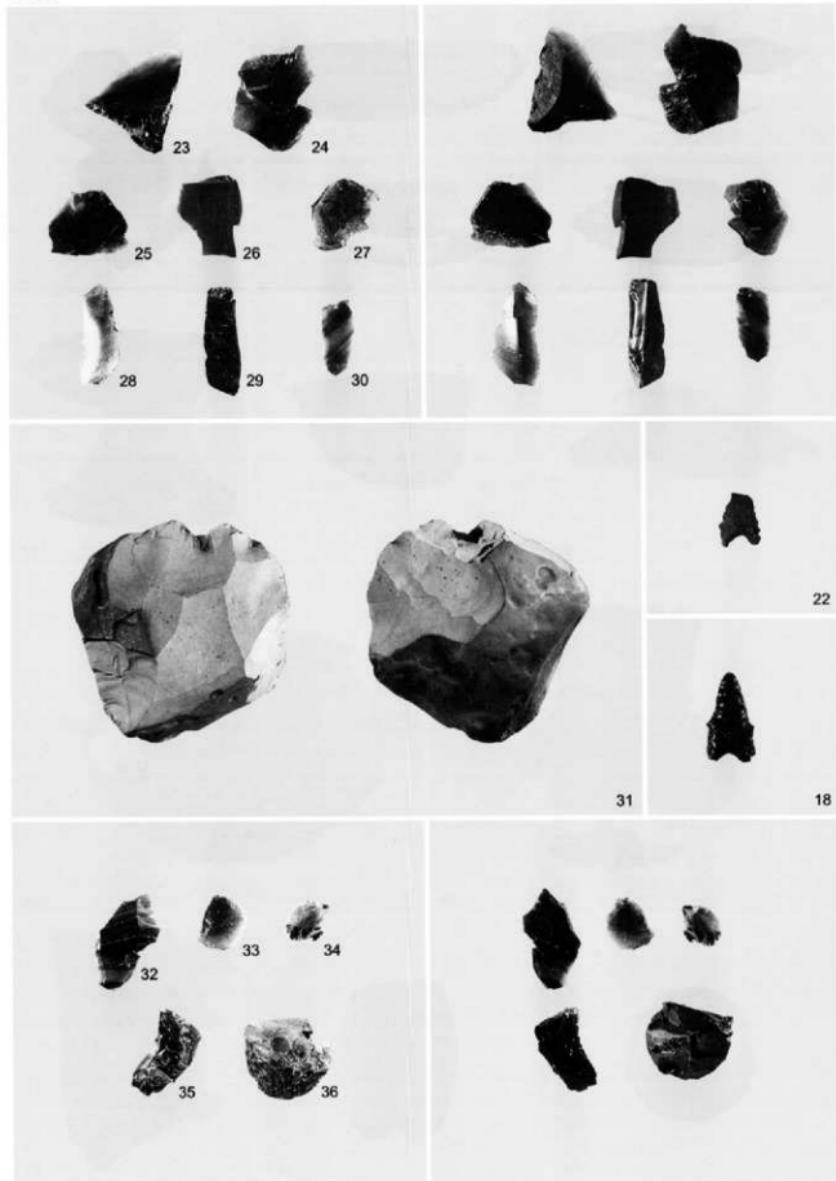


(2) SD01南壁土層（北から）



第4次調査出土遺物

図版8



第4・5次調査出土遺物（縮尺2/3）

**福岡外環状道路関係
埋蔵文化財調査報告**

— 14 —

**福岡市埋蔵文化財調査報告書
(第700集)**

編集・発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
平成14年3月5日
☎092(711)4667

印 刷 株式会社ハザマ印刷
福岡市南区那の川1-20-23